

290  
764

口瑞月口述

靈界  
物語

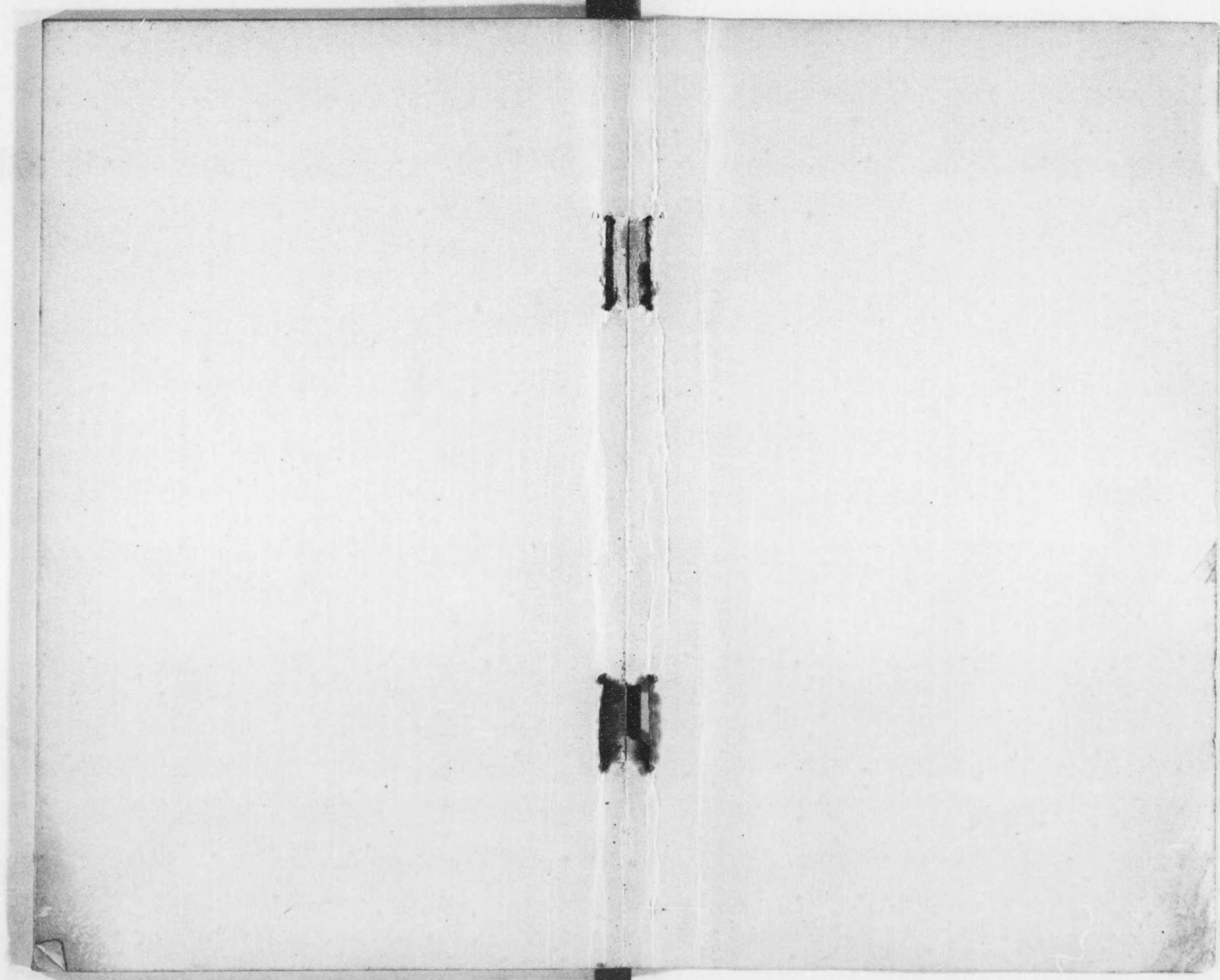
山河草木

卯之卷

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





83115  
409



出口瑞月口述

草木

天聲社發行

大正  
13. 4. 15  
丙交

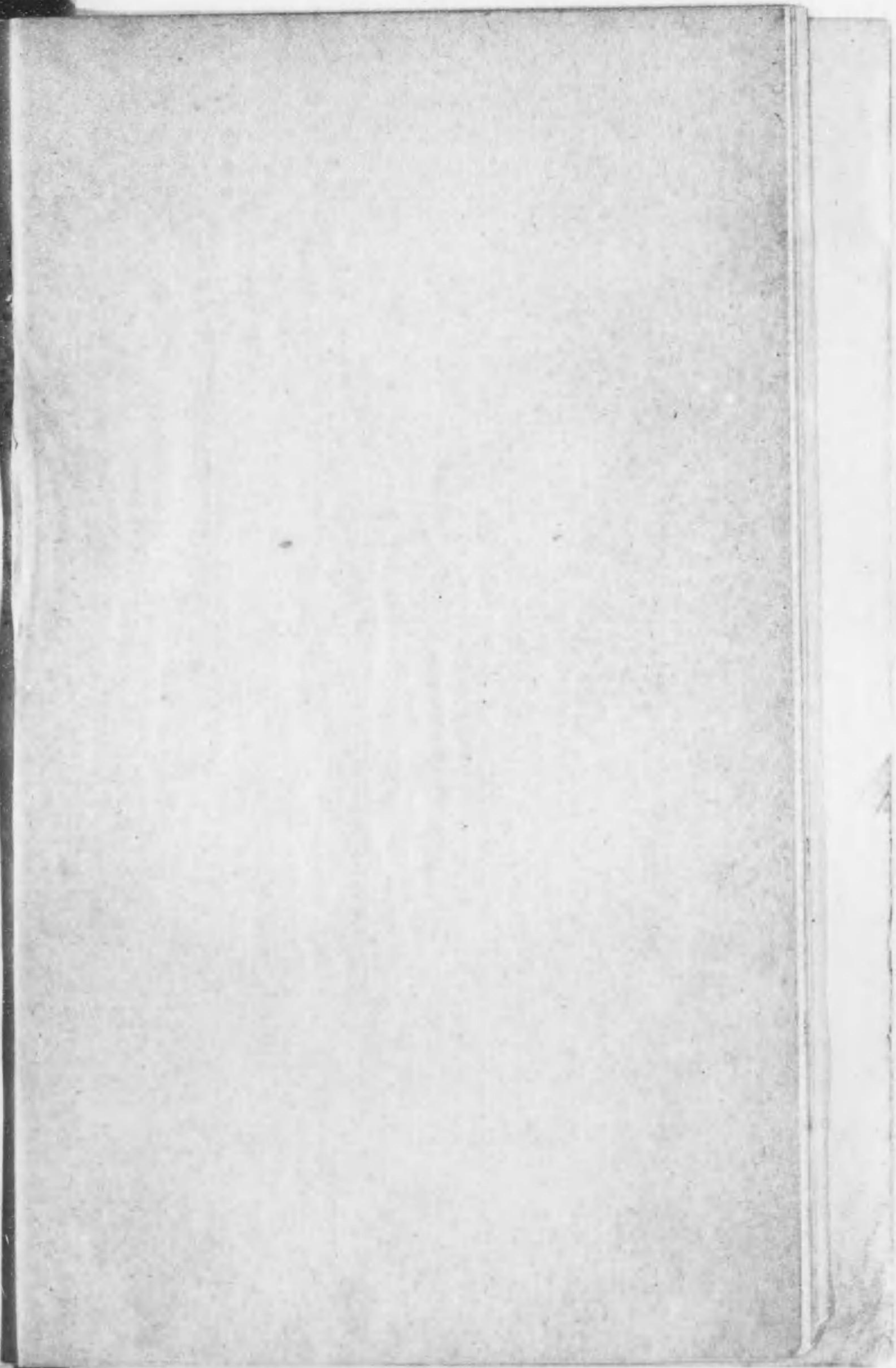
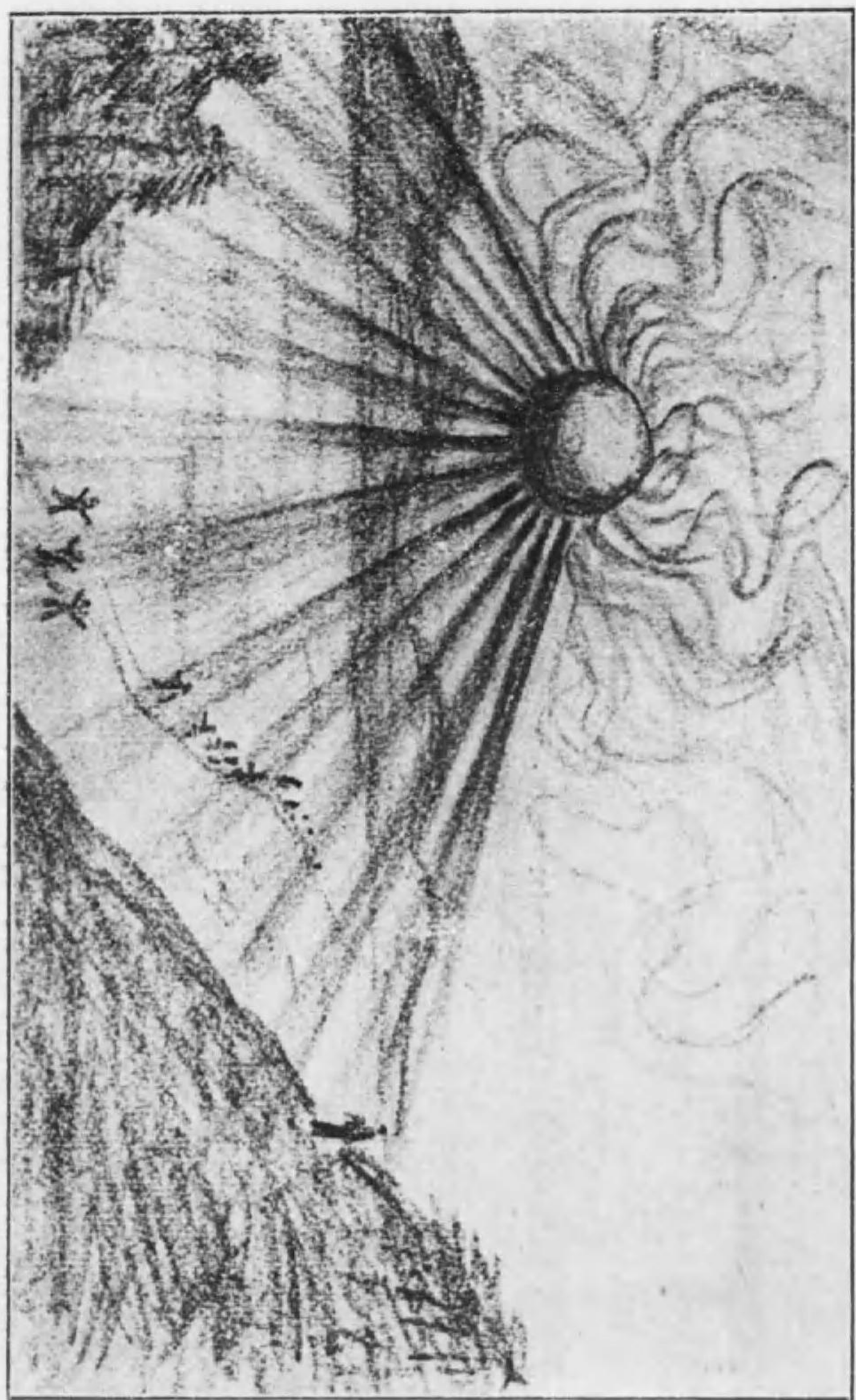
〔植物物語第六十四卷〕





山田 幸次郎  
大正 十一年  
三月 十日

山田 幸次郎  
大正 十一年  
三月 十日



大正十二年七月十三日



### 序

大本三代の結婚問題や瑞月全集の校正その他天聲社の改革等にて、四月より本月まで口述するの間暇もなく、又身体も非常に疲労したるため本書の著作の捗らざりし事を甚だ遺憾に思ひます。本巻は特別篇として現代のエルサレムを背景に小説的に口述したもので他の巻とは大に趣を異にして居ります。救世主の再臨を脚色したもので果して之が事實として將來に實現するや否やは口述者自身に取つて判らないのであります。最後に大本瑞祥會會長井上留五郎氏の夢物語を添へておきましたから御熟讀を願ひます。

大正十二年七月十三日 舊五月三十日

瑞 月 識

瑞 月

救世主ひすの日出島を跡にして

降りますかも日の下の國

瑞御こぞ靈日出島の事了らて

常世の空に光かゞやく

# 山河草木

〔卯の巻〕 目 次

序

歌

一頁

總

說

一

## 第一篇 日下開山

第一章

橄欖山

一

第二章

宣傳使

一四

第三章

聖地夜

三九

第四章

訪問客

五五

第五章

至聖團

六八

第二篇 聖地巡拜

第六章 偶像都……………八一

第七章 巡禮者……………九六

第八章 自動車……………一〇五

第九章 蔭栗毛……………一一七

第一〇章 追懷念……………一二七

第三篇 花笑蝶舞

第一章 公憤私憤……………一四一

第二章 誘惑……………一五七

第三章 試練……………一七七

第四章 荒武事……………一九二

第四篇 遠近不二

第一章 大相撲……………二〇八

第二章 天消地滅……………二二三

第七章 強請……………二四三

第八章 新聞種……………二五二

第九章 祭誤……………二六二

第二〇章 福命……………二七四

第二一章 廻路……………二八三

第二二章 妖行……………二九三

第五篇 山河異涯

第三章 暗着……………三〇三



第二章 妖蝕……………三二〇

第三章 地圖面……………三三一

第四章 置去……………三四三

第五章 再轉……………三六〇

第六章 再轉……………三六〇

第七章 再轉……………三七一

〔附錄〕 夢物語……………三七一

山河草木(卯の卷)目次終

山河草木(卯の卷)目次終

# 山河草木

【卯の巻】

[64]

口述者

出

口

瑞

月

筆録者

加藤 北村

藤村 隆真

明子

澄光

## 總 說

物質界の凡ての欲望を脱却し一意専心神靈世界の建設に没頭せる救世主が、數多の部下の誤れる信仰のために種々の苦難を嘗め、精神的に孤獨となりし淋しさに日出嶋を跡にして神の選みたまひし聖地に再臨すべく、その準備として、秘藏の弟子を選ん

で先づ萬事準備のため出立せしめたる所へ、ユラリ教の教主自稱日の出神の生宮のお  
 寅婆アさんが三人の弟子を伴ひ、その跡を追ひて極力妨害を試み、自ら救世主と名乗  
 りて獅子奮迅の躍動をなす至極滑稽な物語であります。

大正十二年七月十三日舊五月三十日

瑞 月 識

瑞 月

日の本のおんため人のため

降り行く身にさやる曲なし

山 阿 草 木

第 一 篇 日 下 開 山

### 第一章 橄欖山 (二六三〇)

エルサレムの郊外にアメリカンコロニー云ふ宏莊な建築物があつて、雲を壓して聳立つて居る。今より四十年ばかり以前に、アメリカからスバツフォード云ふ猶太人が基督の再臨が近づいて、その場所は橄欖山の頂上だといつて基督を迎へる準備のために來て居つたのが抑の始りで、其後は國籍や人種の異同を問はず、基督再臨を信する人々が是に加はつて、自分等の財産を全部提出して共同生活を行つて居る。各自がその分に相應して働いて得た利益は、之を共同生活の爲に使用する云ふ基督教的精神に基く一つの團體が組織さるゝに到つた。その創立の最初には、人々は非常に狂信的で、自分の年頃になつた時も結婚さへしなかつたものだが、現時は人々の考

へ方が餘程自由になり、團體員の中で結婚をする様になり、幾組かの家庭が出来て今の團體員は第二の時代の人々である。全体で約壹百人ばかりで、互に兄妹と呼び合つて居る。國籍は種々で一番に多いのがスエーデン人である。そしてアメリカンコロニー云ふ名稱が附されてある。創立者が亞米利加人であつたから此名を附すことになつた。現今ではアメリカ人は數名に過ぎない。ユダヤ人は十數名集つて居る。

創立者の子息スバツフォードは熱烈な信仰者で、マグダラのマリヤ云ふ猶太人の婦人が加はつて居る。この婦人は、殆どスバツフォードと相並んで、アメリカンコロニーの牛耳を採り大活動を續けて居る。そして三十歳を過ぎたるにも拘らず、獨身生活をやつて居る。この團體員は、何れも身の一切を主の神に任せ切つて居る態度と云ひ、人類に對する愛の發現と云ひ、到底他で見る事の出来ない美しさである。

凡ての猶太人は、この神の廣い教旨を聞いて居るに關はらず、民族的偏見に囚はれ、彼等は特有な、いゝ意味のデレツタント的の性質から此の域まで深く達し得る者の少いのに、彼團體員は神意を克くも体得し、抱擁歸一博愛平等の大精神を有して居る公平無私な態度には、感歎せざるを得ないのである。

\*

\*

\*

スバツフォードは朝早くから、一間に立籠り熱心に神の宣示を祈つて居る。そこへマグダラのマリヤが、少し顔色を赤らめながら忙しげに走り來り、兩手を突いて、マリヤ「聖師様、妾は何だか昨夕から身体の様子が變つて來た様で御座いますが、一つ何神の歸神なりや、たゞしはサタンの襲來なりや、嚴重なる審神者をして戴き度う御座います」

聖師はマリヤを一瞥して、眉をひそめながら

聖師「成程、貴女は御様子が見えますよ。さうれ、私が及ばず乍ら審神者を勤めさせて頂きませう。随分強烈な感じ方ですわ」

マリヤは、

「何分よろしく御願ひ申し上げます」

と言つた限り、聖師の前に座を占め両手をキチンと胸のあたりに組合せ、

マリヤ「この方は大黒主の神、八岐大蛇の守護神であるぞよ。汝スバツフォードよつく

聞け、メシヤの再臨を夢想して、今日まで殆ど四十年間数多の愚人を誑惑し來つた

横道者奴、メシヤなどがこの聖地に降つて何になるか」

聖師「是は怪しからん。汝は今自白いたした八岐大蛇の化神悪神の張本、吾が言靈

の神劍の威力を知らぬか」

マリヤ「アハ、、、今此方が憑依して居るマリヤなるものは、汝と同様に無智迷障の婦人到底度し難き代物なれ共、憑るべき身魂なき故に、不満足ながらも此方が御用に使つたのだ。この婦人はユダヤの生れ、神の選民と申して威張つて居るに由つて、懲しめの爲この肉體を臨時苦しい用に使つたのだ。其方も東方の星とか、メシヤが日出島より再臨するとか申して、夢幻の境遇にさまよふ馬鹿者、この方の託宣を耳を洗つて諱んで承はれ。今より三千年以前に、パレスチナの本國を他民族に奪はれ、世界到る處に於て虐げ苦しめられ、無籍者の癩に吾々は天の選民なりと主張しメシヤを待ち望んで居るではないか。左様な根拠もなき妄想に耽るよりも、心を改めてこの方の言葉を承はり、汝等民族のために全力を盡す心はなきや」

聖師「現代の如き常闇の世となれば、到底今日までの宗教や政治の行方では駄目だから、吾々は、大聖主メシヤの再臨を待つて居るのだ。聖書の中にも、吾々猶太民族が天下を支配すべき神權を保有することは明かに示されてある。故に吾々はこの豫言の實現すべきことは確信して居る。然し乍ら、この世界は神の保護を離れては無事泰平なることは出来得ない。就ては超人間的大偉人即ちメシヤが現はれなくては如何にも成すことは出来ない。それ故に吾々は神を信じ神を愛し、何事も惟神に任せて行動して居るのだ。汝何れの魔神かは知らねども、吾々の信仰に對して妨害を加へんとするか。惡神の猖獗つた世の中は今迄の事だ。今日は最早メシヤ再臨の時期に近づいたのだから、惡神の出で威張る時ではない。一時も早くマリヤの肉體より退出いたせ」

と威丈高に詰問すれば、マリヤの惡靈は大口開けて高笑し

マリヤ「アハ、、、愚なり汝スバツフォード、汝の四十年來待ち焦れて居るメシヤと稱するものは、無抵抗主義を標榜せる瑞の御靈と申す腰拔人物だ。この方の幕下の神のために散々に苦しめられ、聖場を破壊され、身の置き所を失つて仕方なしに、此パレスチナの國へ逃げ來らんとして居る狼狽へものだ。手具脛曳いて待つて居る大黒主、山田、嵐の此方の繩張内へウカ／＼來る大馬鹿ものだ。左様なものをメシヤと稱して待つて居る其方等の心根が可憐しいわい。アハ、、、兎角現世は權力と金の世界だ。黄金萬能主義だ。世界の富を七分まで占領いたして居るユダヤ人は大黒主の何れも幕下だ。汝は同じユダヤに生を享けながら不心得千萬、高砂島のメシヤを待望するとは何の事、眞正のメシヤはこの方山田、嵐様だ。世界の所在強大國を片端か

ら崩壊させたのは、皆この方の三千年來の經綸の賜だ。今にモ一つの高砂島を崩壊すれば、三千世界は大黒主山田嵐の意の儘だ。諺にも時の天下に従へ、長いものには巻かれよと申すでないか。三千年以來結構な神の國をキリスト教國に占領せられ、神の選民は所在輕蔑と迫害を蒙つて來たユダヤの元の聖地を取返したのも皆此方が經綸の現はれ口、サア是よりは山田嵐様の天下だ。汝等も今の間に改心致してメシヤ再臨の妄想を止めないよ、應ては吞臍の悔を遺すであらう」

聖師「吾々は國籍は假令ユダヤに置くとも、眞の神の選民である。汝等の如き惡神の選民では無い。今日のユダヤ人は眞の神を忘れ汝如き邪神の幕下となり、体主靈從的行動を以て、九分九厘まで世界を惑亂いたして來よつたが、モハヤ惡神の運の盡きだ早く改心致したが良からうぞ」

マリヤ「テモ扱ても愚鈍な奴だなア。汝は愛國心のない大痴漢だ。汝等の祖先は何れもキリスト教國に壓迫され、アラビヤの荒野に四十年の艱苦を嘗めた事を知らぬか。今迄は彼のキリスト教國の天下であつたが、世は廻り持ちだ。何時までも持ち切りには爲せられないぞ。今に山田嵐の守るユダヤ民族が全世界を支配したすのだ。丑寅の金神などが種々に此方の仕組の邪魔を致したるに由つて、高砂島へ追ひやつたのも一つの仕組だ。大江山の酒香童子と現はれて、一時活動を續けたのも矢張り此方大黒主山田嵐様だ。然し乍ら時期未だ來らずと感じ、一旦引揚げ、このパレスチナに於て萬事抜目なき計畫を廻らし、漸くパレスチナの本國を手に入れた以上は、如何に天下廣しと雖も、モハヤ此方の自由だ。シオン團の活動も、ユダヤ民族の熱烈なる信仰力も皆この方の守護のためだ。アハ、、、」



聖師「シオンとは日の下又は日向と云ふ意味では無いか。日の下は神の國だ。その神の國は高砂島だ。神の國よりメシヤを迎へるのは當然じやないか。其方の言葉は實に自家撞着の甚だしきものだ。最早吾々に用は無。早くマリヤの肉體より脱出したさぬか」

マリヤ「アハ、、日の下とは即ちパレスチナの事だ。太陽は東より昇り、中天に來た所を日の下といふではないか。高砂島は東の國即ち日の出島だ。世界の中心は太陽の真下だ。試みにパレスチナを中心として、約七千哩、八千哩の半徑を以て大きな圓環を引廻して見よ。八千哩東に當つて高砂島がある。西八千哩にメキシコあり、北六千八百哩に、ナウルエーが皆這入つて居る。世界に於ける國と云ふ國は皆この圓環の内に這入つて居る。斯る算きパレスチナこそ世界の中心だ、

日の下だ、日向の國だ。爰に國を建てたのは即ち此方の仕組だ。何を苦んで、高砂島から雲に乗つて來るとかいふキリスト教の神を待つ必要があるか。馬鹿だのう」と怒鳴り立てた。

聖師は一生懸命に大神に祈願をなし、天津祝詞を奏上するや、流石の大黒主山田嵐神も聖師の言靈の威力に打たれマリヤの肉體を其場に倒して逃げ去つて了つた。マリヤは初めて正氣になり

マリヤ「聖師様、妾には何だか憑依して居たやうで御座いましたなア。善神でせうか邪神でせうかなア」

聖師「イヤ最う、大變な元氣な事を言ふ神で御座いましたが、私の祈願に依つて漸く貴女の體を退却しました。油断のならぬここに成つて來ました。惡神の仕組も餘程進

んで居りますから、我々團員は餘程しつかり致さねばなりません。然し乍ら誠の大  
神様が邪神に化つて、吾々の信仰をお試しになつたのでは有るまいかと俄にそんな  
気分になつて來ました」

マリヤ「吾々は何處までもメシヤの再臨を信じて父祖以來待つて居るのですから、今に  
なつて心を變へることは到底出來ませんからなア」

聖師「左様です。お互にその心で居りませう」

マリヤ「聖師様、妾は何だか俄に橄欖山へ登りたくなりましたから、一寸參拜して參り  
ます。何だかメシヤ様に遭はれる様な心持がいたしますから」

聖師「貴女は平素から立派な靈感者だから、何か神様の御都合があるのかも知れませ  
早く參つてお出でなさいませ」

マリヤ「ハイ有難う。後は宜敷く御願ひいたします」

といそ／＼として輕装の儘、エルサレムの停車場へ至知らず／＼何ものにか引かる、  
心地して驛前に着いた。

(大正二二、七、一〇、舊五、二七、出口群月録)

瑞 月

高千穂の峰より降る神人の

行途に匂ふ白梅の花

皇神の教のまに／＼進む身は

醜の曲靈もさやる術なし

## 第二章 宣傳使(一六三二)

カンタラ驛からスエズ運河を横ぎつて、エルサレム行の軍用列車に乗り込んだ一人の東洋人があつた。汽車は茫々たる大砂漠の真中を一瀉千里の勢で馳走して居る。窓外は、森林も田畑も、河川も村落も人の影さへも、眼に入らない寂寥さである。所々に小屋の様な、殺風景な、停車場が黙々として建つて居る。シナイ山は遙の遠方にボンヤリと霞んでゐる。ユデヤの高地に掛つた見えて、丘が刻々に急勾配になつて橄欖の樹が窓外に迫々に見えて来る。四十歳前後の、一人の眼のクルリとした色の淺黒い、何處ともなしに凜々しい東洋人らしき宣傳使は、高砂島から派遣されて數十日間の海洋を渡り、メシヤ再臨の先驅として神の命により遙々出て來たルートバハーの

教主、ウヅンバラ、チャンダーに先だつて來た、ブラバーサと云ふ紳士である。

ブラバーサは世界各国の言語にも通じ、且つ近來流行のエスベラント語にも精通して居た。それ故特にルートバハーの宣傳使として拔擢され、萬里の海洋を打渡り、異域の空に聖跡を尋ねてメシヤ再臨の先鋒として赴任したのである。このブラバーサには郷國高砂島に一人の妻と一人の愛娘が残つて居る。ブラバーサは窓外の際限もなく廣く展開せる砂漠を眺めて、聖者の古の事蹟を思ひ浮べ、感慨無量の体で吐息を漏らして居る。

隣席に控わてシガーを燻らして居た白髪の老紳士は、ブラバーサの傍近く寄つて、さも馴々しげに握手を求めた。ブラバーサは海洋萬里の不見不識の國で同じ車上に於て握手を求められたのは實に意外の歡びに打たれざるを得なかつた。ブラバーサは直

に立つて老紳士と握手を交へた一刹那、百年の知己に逢つた様な懐しさを覺えた。

老紳士「私はバハイ教のバハーウラーに申すものですが、メシヤの再臨の近づきし事を

神様より承り、老軀を提げて常世國から今日漸に茲まで無事到着致しました。貴

師は何れより御越しで御座いますか。一寸拜顔しただけでも普通の御人とは見ま

せぬ。聖者と御見受いたしますが、御差支なくば御話しを願ひたいものですなア」

ブラバーサ「ハイ有難う御座います。私も貴師の様な聖者に、異域の空で而も同じ車中

に御眼にかゝり、互に御道の談を交換さして頂くのは望外の幸ひで御座います。實

は私は高砂島の中心地點に宮柱太敷立て、鎮まりたまふ、大國治立大神の御許に

仕仕奉るプロバガンディストで、ブラバーサに申すもので御座いますが、暫くエルサ

レムの靈氣に觸れ、神界の御經綸の一端に奉仕いたしたきものと神命のまに／＼遙

々出向致しましたものです。何分宗教や信仰には、國籍や人種別なきの忌はしき障

壁は御座いせんから、何卒同胞として親交を願ひます」

バハー「イヤ、お互様に御懇親を願ひませう。私は現代の宗教家の態度に飽きたらな

い一人で御座います。同じ太陽の光の下に生育する吾々人類は、何處までも神様

の最愛の御子として、相愛し相助け合つて行かねばなりません。そして凡ての迷

信から脱離した宗教、過去の死神死佛は言ふ迄も無く、微の生れた形式から解放さ

れた宗教、宗派根性を超越した眞善美愛に徹底した宗教、種々の傳説や附會や迷信

を交へた上に紛雜した教理と註譯に織込まれた曼陀羅的の教典から離脱した宗教、

名實一致、靈肉一體、神人合一、聖凡不二を實現した宗教、其時代に必要あつて起

れる教祖を以て唯一の救世主となし、教祖の教示を萬世不易の聖言となす偏狹固陋

なる牢獄的信仰の束縛を解いて、萬聖の大集會即ち（世界の國會開き）を出現せしむる宏大無邊の宗教、一夫一婦の大道を明示した宗教、世間と出世間の障壁を除却して、眞に一實在の生ける道を教ふる宗教、善と惡、信者と不信者、救済と罪惡、天界と地獄とを區別して爭論の種を蒔く狹隘な宗教から脱却して、心底から親愛の目的として凡ての人類を見る所の眞の救世の宗教、國語、勞働、國際等の問題、學術と宗教との問題等一切を解決し、世界人類をして平等に光明世界の住民たらしむる權威ある宗教の必要に迫られて、數十年間あらゆる迫害や艱苦と戦つて來たもので御座いますから、貴師もルートバハーの神使として聖地へ御出張遊ばした以上は互に神の子の兄弟として相提携し、萬國の民を天界に救ふため、持ちつ持たれつの親交を願ひたきものです」

ブラバ「バハーウラー様、只今貴師の御言葉には實に感服いたしました。私が奉ずるルートバハーも、その主義精神に於て寸毫の相違點をも見出す事が出来ません。高砂島に於けるルートバハーの教と、貴教とは東西符節を合する如くで御座いますよ。何うか今後は姉妹教として永遠の親交を御願ひいたしたく存じます」

バハー「何卒よろしく御願ひいたします。時にブラバサ様、現今世界の有様は如何でせう。我々人類のために、天の神様より懲戒的大鐵槌を下される様な形勢になつて來たぢや在りませぬか」

ブラバ「昨日も船中でロンドンタイムスを讀んで見ましたが、其中に我々としては依然として落付いて居られない様な記事が載つて居ましたよ。ルートバハーの教と全然同一でした」

バハー「何んな記事が載つて居ましたか」

ブラバ「表題が二號活字で麗々しく「死んだ新聞王の靈が探偵小説家のコナン、ドイル氏に世界の大災厄が来る」と云ふことを囁いた」と出て居りましたよ。今懐に持つて居りますから朗讀いたしませう」

と云ひつゝ、懐より細かく折つた新聞を取り出し、押し開いて、

ブラバ「目下米國にあるコナン、ドイル氏は、三十一日、桑港に於て左の奇抜な發表をなした。曰く「新聞王故ノース、クリフ郷の靈が余に囁くに「汝等の生存中の世界に一大災厄が来る。若し人間が靈的に改造されて、この災厄を除かなければ、千九百十四年の世界大戰よりも更に恐ろしい運命に陥る」一體○國人は餘り醒醒し過ぎる。余も生存中同様の誤謬を敢てしたが、物質的進歩の競争のため、人間

の智慮は滅び遂に災厄が来るものである」と云ふことを初めて理解するに至つた」と、

ドイル氏は全く眞剣に眞面目に右の言明をして居る」云々

と讀み了り

ブラバ「我々の信仰いたしますルートバハーも亦同様の神示を三十年以前から主張して來ましたが、物質的研究にのみ焦心して居る世界の學者も、其他の同輩も容易に信じて呉れないのみか、流言浮説をなして人を誑惑するものだと言つて、聖主を始め信者は所在社會上下の壓迫を受けて來ました。聖主の教にも、右同様に人心の悪化は宇宙に邪氣を發生し、遂には地異天變を招來するものだと説かれてあります。天地が今に覆るぞよ。吃驚箱が開くぞよ。脚下から鳥が飛つぞよ。靈魂を研いて改心致して下されよ。神は世界の人民は皆最愛の我子であるから、一人なりとも助けてやり度

いのが胸一杯であるから、永らく豫言者の口と手に由りて世界の人民に氣を付けて居るなれど、餘り今の人民は科學に凝り固まりて神の申す眞誠の教が耳に這入らぬので、神も大變に心を碎いて居るぞよと仰せられて居ます」

「如何にも、眞に結構な御神示ですなア。それに寸毫の間違ひも御座いますまい私も神示によつて、貴師の御説と同様のことを承はりましたので、バハイ教を開いて世界の同胞に警告を與へて居るのです。最早メシヤの再臨も餘り長くは有りませぬ」

「左様です。メシヤの再臨は世界の九分九厘に成つて、此エルサレムの橄欖山上に出現されること、確信いたして居ります。既にメシヤは高砂島の桶伏山麓に再臨されて居りますよ。再臨と再臨とは少しく意義が違ひますからなア」

「救世主が最早再臨されたこと仰有るのですか。大聖主メシヤたる可き神格者には

九箇の大資格が必要ですが、左様な神格者は容易に得られますまい。先づ第一に

- 一、大聖主は世界人類の教育者たること
- 二、其教義は世界的にして人類に教化を齎すもの成ること
- 三、其智識は後天的のものに非ずして自湧的にして自在なる可きこと
- 四、彼は所在賢哲の疑問に明答を與へ、世界の所在問題を決定し、而して迫害と苦痛を甘受す可きものなること

五、彼は歡喜の給與者にして、幸福の王國の報導者なる可きこと

六、彼の智識は無窮にして、理解し得べきものなる可きこと

七、其言説は徹底し、其威力は最悪なる敵をも折伏するに足るの人格者なる可き

八、

悲しみと厄難は、以て彼を悩ますに足らず、その勇氣と裁斷は神明の如く、而して彼は日々に堅實を加へ、熱烈の度を増可きこと

九、彼は世界共通の文明の完成者、所在宗教の統一者にして世界平和の確定と世界

人類の最も崇高卓絶したる道德の體現をなす可き人格を有すること 以上

爾等が此等の條件を具備したる人格者を世に求むる時には、初めて彼によつて嚮導をうけ光照を被るを得ん」と我バハの聖主アブデュル、バハは仰有いました。

果して右九箇の大資格を備へた聖主が再誕されて在るとすれば、我々は實に至幸至福の身の上で御座います。併し人各信仰に異同のあるものですから、私はアブデュル、バハこそ大聖主と信じて居るものであります」

ブラバ 「成程大聖主はアブデュル、バハ様でせうが、最早現界に生存遊ばさない上は

如何に九箇の大資格を備へたまふとも、今や來らんとする世界の救濟事業に對しては、御手の下し様がありますまい。勿論聖主の教を汲んで、後の弟子達が完成されるれば兎も角もですが」

バハ 「貴師の仰有るメシヤの平素の言心行に就て、一應御話しを承はり度いものですな」

ブラバ 「先に貴師は九箇の大資格を羅列して説明下さいましたが、其大資格者に私は朝夕接從して居りましたから、大略申し上げて見ませう。虚構も誇張も方便も有りませんから、そのおつもりでお聞きを願ひます」

バハ ウラーは襟を正し、さも謹嚴な態度で、ブラバの談話を耳を傾けて聞き初



めた。

汽車は早くもユデヤの高丘を足重たけに刻んで上つて行く。

ブラバ「私のメシヤミ云ふ人格者は目下高砂島の下津岩根に諸種の準備を整へて居られます。そして其名はウツンバラ、チャンダーと謂つて、實に慈悲博愛の權化とも稱すべき神格者です。世界人類に對して、必須の教育を最も平易に懇切に、施し玉ひつゝあるのです。故に宗教家も教育家も、政治家も、經濟學者も、天地文學者も軍人も職工も農夫も皆尋ね來つてそれ相應の教を受け、歡んでその机下に蝟集して居ます。如何なる難問にも當意即妙な答を與へられ、何れも満足して居ります。是が只今貴師の仰せられた第一の資格たる

「大聖主は世界人類の教育者たるべきこと」の條項に匹敵するやうに思ひます」

「成程御尤もです」

と頭を三ツ四ツ振つてうつむく。

ブラバ「ツルク大聖主が伊都の御魂と顯はれ玉ふて、三千大千世界一度に開く梅の花の大獅子吼を遊ばしましたが、此御方は約りヨハネの再臨だと信じられて居られます。そして基督とも謂ふべき美都の御魂の神社、ウツンバラ、チャンダーと云ふ聖主が現はれて、世界的の大教義を宣布し、凡ての人類に教化を與へたまひ、今や高砂島は言ふに及ばず、海外の諸國から各種の宗教團體の教主や代表者が聖主を世界の救世主と仰いで参り、其教義の公明正大にして且つ公平無私なるに感化され、日に月に笈を負ふてその門下に集まつて來て居ります。今貴師の仰せになつた第二の大資格たる

「その教義は世界的にして人類に教化を齎す可きものなること」の條項に合致するものでは有りますまいか」

バハー「御尤もです。第三の資格に合致した點の御説明を願ひます」

ブラバ「我聖主ウツンバラ、チャンダー様は、小學校へ通ふこと僅かに三年で、しかも世界智識の寶庫にまで言はる、程の智識を有し玉ひ、天地萬有一切の物に對して深遠なる理解を有し、三世を洞觀し、天界地獄の由來より過去現在未來に涉りて如何なる質問にも對しも遲滞せず、即答を與へ、且つ苦集滅道を説き道法禮節を開示し泉の如く清々として湧出するその智識には、如何なる反對者とも雖も感服して居りますよ。天文に地文に、政治に宗教に、道德に藝術に、醫學に曆法に、詩歌に文筆に演説等何れも自湧的に無限に其眞を顯はし得ると云ふ稀代の神人であります。幼時

より八ツ耳、神童又は地獄耳などの仮名を取つて居た方ですからなア。今も猶、神政成就の神策に關する神秘的神示を晝夜執筆されつゝあります。世界各国の國語に雖も、未だ一度も學んだ事の無いお方が、凡ての國の言語が習はずして口から出て來るのですから、我々はさうしても凡人だとは思ひませぬ。何人も聖主を指して生神だ生宮だと崇めて居りますよ。所謂貴師の仰せに成つた

「その智識は後天的のものに非ずして、自湧的なる可きこと」に合致するぢやありませんか」

バハー「へエー、何と不思議な方ですな。それこそ眞正の大聖主メシヤですな」

ブラバ「それから瑞の御魂の聖主は、あらゆる賢人哲人の疑問に對し、即答を與へて徹底的に満足せしめ、且つ世界に所在種々の大問題に對して決定を與へ、種々難多の

迫害と苦痛を甘受し、常に平然として心魂にも止めず、部下の罪科を一身に負擔して泰然自若、日夜感謝の生涯を送つて居られるのです。如何なる迫害も苦痛も聖主と對しては、暴威を振ふ事は出来ないと思ひます。是が第四の條件に匹敵せる大聖の資格の一ではありますまいか」

「パー」なる程感心いたしました。それから第五の條件は如何で御座いますか」

「ブラバ」聖主は實に歡喜の給與者とも云ふべきお方です。如何なる憂愁の雲に閉されたる時にも、聖主の御側に在れば忽ち歡喜の心の花が開きます。そのお言葉を聞けば直に天國の福音を聞く如く、樂園に遊ぶが如く、何事も一切萬事忘却し、歡喜の情に溢れ、病人は忽ち病癒む、失望落膽の淵に沈むものは希望と榮光に充たされ、一刻も御側を離るゝ事が出来ない様な氣分になつて了ひます。又身魂共に至幸至

福の花園に遊び、天國を吾身内に建設するやうになつて了ひます。實に仁慈と榮光との權化とも云ふべき神人で御座いますよ。斯くてこそ三千世界の救世主だと思ひます。次に第六の資格としては、聖主の深遠宏大なる内分的智識です。その深遠なる智識に由つて、無限無窮に人類の身魂を活躍せしめ、老若男女智者愚者の區別なく、直に受け入るゝ事の出来る自湧の智識と言靈を用ゐて衆生を濟度されます。それ故、一度聖主に面接し又はお言葉を聞いたものは、決して忘れる様な事は無く、且つ時々思ひ出して歡喜に酔ふのです。婦女や愚人にも理解し易く、且つ宏く深き眞理を、平易に御開示下さいます。

又第七の資格としては

過去現在未來に渉る一切萬事の解説は、終始克く徹底し、前人未發の教義を極めて

平易に簡單に了解し易く説示し、内外種々の反抗者や壓迫者に對しても、凡て大慈大悲の雅量と神直日大直日の神意に従ひ敵を愛して、終には敵をして心底より悦服せしめ、善言美詞の言葉を以て克く言向和し、春野を風の渡るが如くその眼前に來れるものは、一人も残らず善道に導きたまひ、自己に對して種々の妨害を加へ災厄を齎したる惡人に對しても、聊かの怨恨を含まず、貴賤老幼の別なく慈眼を以て見給ふ所は、第七の大資格に合致して居られる様に思ひます。

又第八の資格として茲に申上げますれば、聖主は暗黒なる社會又は〇〇方面より非常な壓迫を受け、終には今や入洲の川原の誓約の厄に逢ひ、千座の置戸を負はせられ、髭を根底よりむしられ、手足の生爪まで抜き取られ、血と涙とを以て五濁の世を洗ひつゝ、あらゆる困苦と艱難に當つて益々勇氣を振り起し、世界人類のために

大活躍を晝夜間斷なく續けられて居られます。又諸事物に對しては神明の如く明確なる裁斷を下し、卽座に解決を與へ、且つその信念は日に月に堅實を増し、熱烈の度を加へ、今や〇〇方面より強烈なる壓迫を受けつゝ、泰然自若として天下萬民のために心力を傾注し、五六七神政の福音を口に筆に開示されつゝ、あります。開闢以來深く閉されつゝ、あつた神秘の門も、漸次聖主に由つて開放されつゝ、あります。何れの世にも勝れたるものは、世界の壓迫を一度は受けるものですが、我聖主の如きは十字架を負ひ玉ひし基督の贖罪にも優つた程の世の壓迫と疑惑と嘲罵とを沿せかけられて少しも撓まず屈せず、殆ど旅人の春の野を行く如き状態で身を處し、能く神の教に従つて忍耐されつゝ、居られます」

「バハ―」どうも有難う。貴師の御談によつて私も大に心強さを感じました。何うか今一

つ第九の資格に就いて、聖主の御行動に關する御説示を願ひます」

ブラバ「聖主は人類愛は言ふに及ばず、山河草木禽獸虫魚の端に至るまで博く愛し玉ふことは、平素の行動に由つて一般信者の崇敬感謝措く能はざる所です。凡ての宗教に對し該博なる觀察力を以て深く眞解を施し、生命を興へ、以て世界の宗教の美點を揚げ、抱擁歸一の大精神を以て對したまひますが故に、凡ての宗教家の白眉たる人士は雲の如く膝下に集まり、何れも皆満足をしてその教を乞ふて居ります。世界平和の確定と宗教の統一、世界共通的文明の建設者にして、最も卓絶したる眞善美の道德體現者だに信じます。やがて時來らば、天晴メシヤミして萬人に仰がれ玉ふ時が來るであらうと、私共は固く信じて疑ひません。アブデュル、バハー大聖主の再來か、その聖靈の再現か、何れにしても暗黒無明なる現社會の光明だに信じて

止まないいで御座います」

バハー「いろいろと御懇切なる御説示に預かりまして、私も大に得る所が御座いました。さうやらエルサレムに着車した様ですから、茲で御別れ致しませう。私はバレスターインの或る高丘に、大聖主の後嗣が居られますので、一寸御訪ねいたし、再び橄欖山上にお目にかかり、結構なる御説示を蒙り度いと存じて居りますから、今後宜敷く御指導を願ひます。そして私はアメリカンコロニーへ訪問したいと思つて居ります」

ブラバ「私も貴師と同道を願ひたいものですが、少しばかり神命を帯びて來て居りますので、先づ第一に橄欖山へ參り、神様の御都合に由つてアメリカンコロニーや貴師の御在所を御訪ねするかも知れませんが、何分にも宜敷く御願申上げます」

と茲に兩人は又もや固き握手を交換し、互に車窓を急いでブラットホームへ出た。

三千世界の人類や

禽獸虫魚に至るまで

救ひの御船を差向けて

誠の教をさとし行く

神幽現の大聖師

太白星の東天に

閃く如く現はれぬ

一切萬事救世の

誠の智慧を胎藏し

世間のあらゆる智者學者

凡ての權威に超越し

迫害苦痛を一身に

甘受し世界を助け行く

歡喜と平和を永遠に

森羅萬象に供給し

至幸至福の神惠の

精神上の王國を

斯の士の上に建設し

無限の仁慈を経こなし

無窮の智識を緯こして

小人弱者の耳に克く

理解し易き明教を

徹底的に唱導す

如何なる惡魔も言靈の

威力に言向和しつゝ

寄せ來る悲哀と災厄を

少しも心に掛けずして

所信を飽くまで貫徹し

裁制斷割の道極め

神人和合の境に立ち

惡魔の敵に會ふ毎に

心は益々堅實に

信仰熱度を日に加へ

三千世界に共通の

眞の文明を完成し

世界雜多の宗教や

凡ての教義を統一し

崇高至上の道徳を

不言實行體現し

暗黒無道の社會をば

神の教と神力に

照破し盡し天津日の

光を四方に輝かす

仁慈の神の神業に

奉仕するこそ世を救ふ

大神人の任務なれ

ア、惟神々々

御靈幸倍坐ませよ

(大正二二、七、一〇、舊五、二七、加藤明子録)

第三章 聖地 夜 (二六三三)

ブラバースはエルサレムの停車場でバハーウラーに袂別し、ブラットホームを出で  
稍廣き街道を散歩し初めた。既に黄昏近くなつた近邊の山々の背景を、美しい夕日が  
五色の雲の線を曳いて色彩つて居る。併し何となく寂し氣な印象が刻まれて來る。シ  
オンの城を正面に控へながら、路の兩側の畑丘に映れて居る落付いた緑色の葉が、痛  
々しげに塵埃のために灰白色に化つて居る橄欖の木を懐かしみながら、車馬の往來繁  
き大通をエルサレムの市街へと進む。

後の方から「モシ〜」と呼ぶ婦女の聲が聞える。ブラバースは後振り返り、立止  
まつてその婦人の近づくの待つとはなしに待つて居た。見れば蔓陀羅模様のある厚

いブエールで顔全部を覆ふて居るユダヤの婦人で、死の國からでも逃げて来た様な氣味の悪い姿であつた。ブラバースは月光の下に、初めて此市中に於て聲を掛られたユダヤの婦人の姿を見て、ギョツミしながら例の丸い眼を嫌らしく光らした。

婦人「見ず知らずの賤しき婦女の身にして、尊き聖師様を御呼び止め致しまして濟まないところで御座いますが、妾はアメリカンコロニーの婦女で、マグダラのマリヤと申す基督信者で御座います。神様の御攝理に由つて貴師の爰に御降り遊ばす事前知し、急いで聖地の御案内を兼ね、尊き御教を承はり度く罷出でました者で御座います。決して怪しき婦女では御座いませんから、何うぞ妾に聖地の案内を命せて下さいませぬか」

と眞心を面に現はして頼む様に云ふ。

ブラバースは土地不案内のこの市中で、思はぬ親切な婦人の言葉を聞いて打喜びながら、

ブラバ「ハイ有難う御座います。私は高砂島より遙々と神命に由つて、聖地へ参向のために来たものですが、何分初めての事ですから土地も一向不案内の處へ、貴婦が案内をして遣らふと仰有るのは、全く神様の御引合はせて御座いませう。併し最早今日は夜分になりましたから、何處かのホテルへ一泊致し、明朝緩くりと橄欖登山致し度きもので御座いますが、適当なホテルを御示し下さいますまいか」

マリヤ「貴師も定めて御疲勞で御座いませうから、今晚はホテルに御一泊なさるが宜しいでせう。聖地巡禮者のために設けられた大仕掛なホスピース、ノートルダム、ド、フランスと云ふ加持力の僧院が御座いまして、其設備は一切ホテルと少しも變りな



く、且つ大變親切で宿料も一宿が一ポンド内外ですから、それへ御案内致しませうか」

ブラバ「カトリックの僧院ですか。夫れは願ふても無き結構な所、さうか其處へ案内を願ひませう」

マリヤ「ハア左様なさいませ。妾も貴師と今晚は同宿して、種々の珍らしい高砂島の御話を承はりたう御座います」

と先導に立ち、カトリックの僧院ホテルへと案内され、今宵は爰に一宿する事となつた。兩人は二階の一室に案内され、夕餉を済ませ、窓外を遠く見やるに、折しも十六夜の満月が皎々として下界を隈なく照らして居る。大きな僧院にも似ず宿泊者は僅かに四五人で、何れも各宗の僧侶であつた。マリヤはブラバにさに向ひ、

マリヤ「聖師様、今晚の月は亦格別美はしき空に澄み切つて聖師の御來着を祝して居るやうですなア。斯様な良い月の夜を室内に明かす事は、少し計り勿體ないじや有りませんか。何うでせう、一月月明かりに散歩でもして御寝みになりましたら、妾もこの月を見ては室内計りに塾居する氣になりませんわ」

ブラバ「成る程良い月です。高砂島で見た月も今この聖地で見る月も、餘り變りはありませんが、何だか月が懐かしくなつて参りました。無爲に一夜を明かすのも神界へ對して濟まない様な心地がします。何うか案内を願ひませうかなア」

マリヤ「ハイ宜しう御座います」

と早くもマリヤは二階の階段を下りかけた。ブラバもマリヤの後からホテルを忍ぶ様にして門外に出た。兩人は市街の外側を西の城壁に添ふてダマスカスの門を目當

に歩を運ぶ。上部が凹凸になつた殿めしいこの城壁や門は、皆中世に造られたものだ  
が、何となく古い市街には應はしい感覺を與へる。この門からダマスカスへの道路が  
通じて居る。兩人は月光を浴びながら、門を潜つて市街の北部を横断し、聖ステファ  
の門へと出た。荒い敷石の道路は、所々に低いトンネル様のアルカードで覆はれて居  
て、月光の輝く下では内部の深い、暗黒面が殊更寂しく物すごく感じられた。道路  
の兩側の所々に、赤いトルコ帽を被つたアラブが小さい茶碗で濃いコーヒを呑んだり  
フラスコ様の大仕掛な装置で水を通過させて長いゴム管で吸入する強い煙草をのん氣  
さうに呑み乍ら、兩人の方へ迂散な奴が來よつたなアと云つた様な顔付きで睨んで居  
た。

ブラバ「彼の男は我々の姿を見て、異様の眼を光らして居ましたが、何かの信仰を以て  
來て居るのですか」

マリヤ「彼の人等は極端なアセイズムを主唱する人々で、妾が聖地を巡拜するのを見  
て、ポリセイズムだと云つて嘲つて居るのですよ。物質文明にかぶれてアセイズム  
者と成つて居るのですから、容易に信仰に導くことは出来難い人達ですわ」

ブラバ「斯る聖地にも依然アセイズム者が入込んで居るのですか」  
マリヤ「アセイズム者は愚か、ソシヤリストもコンミニストもアナーキストもニヒリ  
ストも澤山に入込んで來て居ります。そして此聖地に詣で來る信徒に對して種々  
の嘲罵を浴びせます。妾も何となく神様の尊き御道に救ひたいと思つて、毎日  
毎夜エルサレムの市街に立つて、聲をからして演説をいたしました。彼等は神の  
力の聲を聞いても立腹いたします。そして大變な強迫的態度に出で、遂には鐵拳の

雨を降らすのです。印度の釋尊も縁なき衆生は度し難しと仰有つた相ですが、現界から既に已に身魂の籍を地獄に置いて居る人達には、如何なる神の福音も到底耳には入りませぬ。夫れ故妾の團體アメリカンコロニーの人々は、迷信者扱ひを受け、人間らしく附合つて呉れないのです。モウ此上は聖メシヤの再臨を待つより仕方がありませんわ」

ブラバ「高砂島でも、依然今の貴女の御話と同様に、我々の信奉するルートバハーの教やその信者を迷信者扱ひをなし、あらゆる壓迫と妨害を加へ、大聖主までも邪神扱ひに致して、上下の民衆が擧つて反抗的態度に出るに云ふ有様です。然し是も時節の力で解決が付くものと私は堅く信じて居ります。メシヤが聖地へ雲に乗つて御降りになる曉は、如何なる智者學者も悪人も太陽の前の星の如く影を隠し、屹度メ

シヤの膝下に跪付くやうになるでせう。今暫らくの辛抱ですよ」

マリヤ「一時も早くメシヤの降臨を仰ぎ度きもので御座います。眞正のメシヤは何時の頃になつたら出現されるでせうか」

ブラバ「既に已にメシヤは、或る聖地に降誕されて諸種の準備を整へて居られますから餘り長い間でもありませんまい。併しメシヤは只今の處では十字架の責苦に逢つて、萬民の爲めに苦しんで居られますが、聽て電の東天より西天に閃く如く現はれたまふでせう。私はメシヤ再臨の先驅として参つたものです」

マリヤ「それは何より耳寄りの御話し緩りミ橄欖山上に於て承り度いものですか」

ブラバ「是非聞いて戴かねばなりません」

マリヤ「聖師様、是が有名な聖ステファンの門で御座いますよ」

ブラバ「聖者が曳き出され石で打ち殺されたといふ、傳説のある聖ステファンの門ですか。ヘエー」

と首を傾けて少時憂愁に沈む。

マリヤ「妾は此門を通過する毎に、聖者の熱烈なる信仰力を追想して、益々信仰の熱度を加へたので御座います」

と稍傾首て涙ぐむ。

ブラバ「ア、惟神靈幸倍坐世。信仰力弱きこのブラバサをして、無限の力を御與へ下さいませ。一イニウ三イ四、五ツ六エ七八九十百千萬」

と天の數歌を奏上し、暫し感歎止まなかつた。

あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ

聖ステファンの門を潜ると、少しく下り坂になつて居る。マリヤの後に従つてゲツセマネの有名な園に近づいた。橄欖山は呼べば答ふる様に近くなつて來た。分の厚い丈けの高い、石造の垣で嚴重に圍まれて居るのがゲツセマネの園である。處々にサイブレスの木が頭を出して居るのが見ゆるばかりで、一見して外側からは墓地のやうな感じを與へる。夜の事とて門扉が固く鎖され、内部は見ることが出来ない。そこから團子石のゴロ付いて居る峻しい坂路を攀て、目的の橄欖山へ登るのである。反対側の山の頂きに王座して居る月光に由つて装れたエルサレムの市街、美しい氣高いシオンの娘の姿は眼前に横たはつて居る。その美しさは現實に存在して居るのか、夫れともキリストに伴ふ聯想が幻影を造り出したのかと、ブラバサの想像は瞬間に世界歴史の全體を通つて走る。丁度、高砂島の聖地桶伏山の蓮華臺上の廢墟の前に立つた

時と同様に、然しその二つの感想は、ブラバースに取つては名状しがたきコントラストであつた。キリスト教とヘレニズムの葛藤、夫れは過去二千年間の人類の歴史を解くための悲哀なる鍵となるのであつた。

そして此マリヤ婦人を始め、コロニーの人達や、純真なる數多の奉道者が今に至るまで神を求め、眞善を極め美に焦がる、純な心を痛めて來た事を思ひ浮かべては、そゞろに涙の溢るゝのも覺わなくなつて了つた。ア、この悲哀なる不調和は一時も早く取り除きたいものだ。キリスト教は何處までも現世界を灰色に染なければ止まないであらうか。アクロポリスに踵を向ける事なしにエルサレムに巡禮する事には成らぬのであらうか。何故神様は、此の世をモウ少し調和的に造り玉はなかつたのであらうかと、今更の如く愚痴と歎息を漏らさざるを得なかつた。

ブラバースは黙然として追憶久うして居る。

マリヤ「聖師様、何か頻りに考へ込んで居らつしやる様ですが、妾の行動に就いて御氣に召さない事が御座いますか。遠慮なく仰有つて下さいませ。如何様にも惡き點は改めますから」

ブラバ「イエ、決して、貴女に對して氣に合はない道理が御座いませうか。只々私はこの聖地の状況を見るに付け、古の歴史が胸に浮かんで參りまして、感慨無量の涙に暮れて居たのです」

マリヤは軽く

マリヤ「そりやそりでせう共、妾だつて幾度聖地に來てから、古の歴史を追憶して泣いたか分かりませんわ。然し今晚は夜も更けましたから、ホテルへ一先づ引返し、又

「明日はゆるく案内さして頂きませう」

と先に立つていそぐと歩み出した。爰にブラバサ、マリヤの二人は月光の下をキ  
ドロンの谷をエルサレムの側へ渡り、市街の東南隅の城壁に添ふて、ダング、ゲート  
(汚物の門)へ進んで来た。

ダング、ゲートは昔此門から汚物を運び去つた所と傳へられて居る。シロアムの村  
が眼下に展開して居る。その門を這入つてユダヤ人街とマホメット教徒街との間を通  
過し、ジャツファの門へ出た。

現今のエルサレムの市街はアラブ、ユダヤ人、アルメニヤ人の住んで居る三つの  
區域によつて仕切られて居る。

神殿の跡に近い暗いアルカードの傍に、二三人のアラブが立つて居て、手真似で

譯の分からない言葉で兩人を呼び止めた。兩人は氣味悪る相に聞かぬ風を装ひस्ताく  
と足を早めた。

ダマスカス、聖ステファン、ゲツセマネと斯う云ふ名は熱烈な信仰者の胸に深刻な  
感動を與へるものである。ブラバサは傾首しながら一足／＼指の尖に力を入れ、ウ  
ン／＼と獨り心に嘯きながら、マリヤの後について行く。

然し現代の多数の基督教徒、それ等に對して宗教は無意味な形式、死し去つた傳統  
に過ぎない。呑氣な基督教徒中に眞にダマスカスの道にある使徒パウロの心を自身に  
體驗し、キリストのゲツセマネの園における救世主の御惱みの一端だに汲み得る信徒  
が幾人あるであらうか、と慨歎の涙に暮れて知らず／＼にマリヤに半町ばかりも遅れ  
て了つた。

(大正一二、七、一〇、舊五、二七、北村隆光録)

瑞月

赤心の限り盡して世の中に

しひたげられし神の御使

醜神の威猛り狂ふ世の中は

誠の人を容るゝもの無し

君のため御國のために真心を

つくして後は津見に問はれぬ

#### 第四章 訪問 客(二六三三)

ブラバースは、マリヤの姿を見失ひしより止むを得ず、只一人にてカトリックの僧院に歸つて見れば、四邊は寂として静まりかへり、只耳に入るものは自分の行歩に疲れた苦しげな鼻息と、その足音のみであつた。幸ひ表の門が開け放しになつて居たので、與へられた二階の居間に歸り、ソファの上に横たはつて前後も知らず夢幻の國へ這入つて了つた。

ガン／＼と響く僧院の梵鐘の聲に夢を破られ、ツト身を起して見れば四邊はカラリと明け放れ、午前八時の時計が階下に響いて居た。ブラバースは時計の音を指を折つて數へつ、

ブラバ「ア、もう八時だ。克くもマア寝込んだものだ。それにしても昨夜のマリヤさんは此ホテルには来て居ないだらうか。何處かはなしに神経質な感傷的な婦女だったが、歸神の婦女によく在る習ひ、假に神の命とか言つて心機一轉してアメリカンコロニーへ還つて了つたのだらうか。餘り氣持の良い婦女では無かつたが、その熱烈な信念と親切な態度には實に感謝の至りだ」

と獨語つ、洗面所に入り用を足して再び自分の居間に歸つて來た。

見れば食卓の上には二人前の膳部が並んで居て、ボーイらしき者も居ない。ブラバ「サは此態を見て、

「ボーイは其處等に見當らないが、二人前の膳部が我居間に運ばれて在ることを思へば、どうやらマリヤさんも外の居間に寝て居たのかも知れない。ハテ不思議だ

なア」

と首を頻りに振つて居る。

そこへ除々として這入つて來たのは年の若い美しいボーイであつた。ブラバ「サは、

ブラバ「ボーイさん、夜前の相客たる一人の婦人は何處に居られますかな」

ボーイ「ハイ、昨夜は貴下と御一緒に此の室で御休みになつた事だと思つてお二人の膳部を運んで來たので御座います。別に外には居られません」

ブラバ「ハテナ、合點の行かぬことだ。併し何は兎もあれ朝飯を済まさん」

と食卓に就いて、半時ばかりの間に掻き込む様にして朝の食事を済ませて了つた。ボーイは是非なくマリヤの膳部をブツ／＼小言を云ひながら片付けて了ひ、ブラバ「サの手から應分のポチを受取り、嬉々として次の室に姿を隠した。



ブラバースは椅子に依りかゝつて、二階の窓からエルサレムの市街を心床しげに瞰下し無限の情想を漲らして居た。

そこへ「御免下さい」と静に聲をかけて扉をたゝいたのは、猶太人らしき品格の高い人好きのしさうな老紳士であつた。

ブラバ「何れの方は存じませんが、先づ御這入下さいませ」

と自ら立つて、快く扉を開いて我室へ迎へ入れた。

老紳士はさも満足氣にブラバースの手を握つて、その顔を熟々ながめ、早くも兩眼から涙さへ流して居る。

ブラバ「貴師は何れの方で御座いますか。何となく懐かしくなつて参りました」

老紳士「ハイ、私はアメリカンコロニーの執事でスバツフォードに申す瘡浪人で御座

います。昨夜はマリヤさんが大變な失禮をしたので再び御顔を拜する譯には行かないから、私に一度この僧院の二階の第九番に御逗留だから謝罪に行つて下さるまいかと大變に心配して居られますので、私はその御無禮の御詫を兼て尊い貴師に御顔の榮を得たいと存じ、朝早くから御邪魔を致しました」

ブラバ「ア、貴師がマリヤ様と御一所にコロニーを司宰遊ばすスバツフォード様で御座いましたか。良くマア御尋ね下さいました。サア何うか此方へ」

と椅子を進めた。老紳士は、

スバ「ハイ有難う」

と與へられた椅子に腰打かけ、香りの強い煙草を煙らし初めた。

ブラバ「マリヤ様は親切に聖地の案内をして下さいましたので、大變な便宜を得ました

のです。私の方から御禮に参らねば成らないのですが、夜前突然御姿を見失つたものですから、ツイ失禮を致して居りましたがコロニーへ御歸りに成つて居らるゝと承はり、それで私もヤット胸が落付きました」

スバ「何分マリヤさんは靈感者ですから、時々脱線的行動を初められ、後になつて毎時自分でも心配をされるのです。斯んな事は今日に初まつた事では在りません。私はマリヤさんの辯解と訛役とにいつも使はれて居るのです。アハ、、、」

ブラバ「マリヤ様は途中に於て何物かを靈視されたのでせうか」

スバ「話によれば貴師の眉間より最も強烈なる光輝が放出し、神威に打たれて同行する事が出来なくなり、思はず知らず恐怖心に追はれて尊き貴師を見捨て逃げ歸つたこと申して居られました。私はコリヤきつと邪神の憑依だらうと思つて審神を行つて見

た所、案に違はず山田嵐の惡靈が憑依して居りまして、貴師の聖地へ來られたことを大層恐れ且つ嫌つて居るのです。惡靈の退散した後のマリヤ様は立派な方ですが餘り貴師にすまないからと言つて心を痛め、私に謝罪に行つて來よとの事で御座いました」

ブラバ「ハア決して左様な御心配は要りませんから何うか宜敷く仰有つて下さいませ」

スバ「ハイその言葉を傳へますれば、マリヤさんも大に喜ばれませう。昨夜貴師の御案内を爲すべく夫れも神示によつてコロニーを立つて行かれたのです。さうか聖師様、一度コロニーまで玉歩を枉けて戴けますまいか」

ブラバ「ハイ有難う御座います。是非々々御世話にあづかりたう御座います。時にスバツフオード様、イスラエル民族たる猶太人も三千年の艱苦を忍んで漸く故國を取り

還しましたねー。時節の力に云ふものは實に恐ろしいものですなア」

スバ 「ハイ有難う。私等も依然イスラエル民族で御座いますが、漸くにして自分の公然たる國が小さいながら立つ様になりました。世界の三大強國が何れも必死の勢ひでこのパレスチナを手に入れやうとして、終には御承知の世界戦争までおつ初めたのですもの。夫れが放浪の民たる我々民族のものに還つて來たに云ふのは全く天祐と申すより外はありません。要するにメシヤ再臨の準備として、神様が我々に國を持たして下さつたのだと思ひます」

ブラバ 「地球の中心即ちシオンの國ですから、獨英米などの強國は欲しがらるのも無理はありませんまい」

スバ 「獨逸の造つたバクダット鐵道や英國の拵へたアフリカ鐵道、アメリカが拵へかけて居るサイベリヤ經由の大鐵道も皆このパレスチナを目標として居るのですが、斯うなる以上は是等の大鐵道も又イスラエル民族たる我々の爲に利用さるゝことゝ成つて了りました。此の鐵道さへ利用すればユダヤ民族が世界を統一し得ることは明白な事實であります。然し今日の猶太人は物質慾が強きため、肝心の神様を忘れて居る者が多いので困ります。人間の智慧や力量では九分九厘までは何事でも成功いたしますが、最後の良めは何うしても神様の力でなくては成りません、夫れ故我々は大神の表現神たるメシヤの再臨を待つて居るので御座います。昔パレスチナが神の選民と稱へられたイスラエル人の手に與へられた當時は、密滴り乳流るゝと言はるゝ、カナンの國でサフラン熏じ橄欖匂ふ聖場と詩人に謳はれた麗しい景色の好い所でありましたが、今日となつては其面影も無く荒れ果て、了つたのですが、其パレ

スチナが再びユダヤ人の手に戻つて昔の橄欖山の美しい景色が段々に出て来るやうに成つて来ました。天に坐します神様はメシヤの再臨に先立ち、パレスチナを御自分の選みたまひました所のユダヤ人に御任せにならんが爲に、數千年前から此美しい使命を與へて選民たるの資格を備へしめんとして四十年間三百萬の人間を苦しめ給ふたのです。三百萬の者が飲むに水無く、食ふに食物の出来ない所で、或は親が死に子が死に、何代も續いて四十年間苦行を嘗めさせ玉ふたのもイスラエル帝國の國民性を養はんが爲の御經綸であつたのだと考へらるゝのです」

ブラバ「猶大人はキリストを殺した爲に、他民族から排斥され、種々の困難を嘗めて來たのでは在りませぬか。そうすれば若しも有力なる猶大人が現はれて世界を統一した時に於て、凡ての異教國の人民に對して復仇的態度に出づる様なことは有りま

すまいかなア」

スバ「多くの同胞の中には左様な考へを持つて居る者があるかも知れませんが、イスラエル人は比較的善良な民族ですから、一時は例へば過激な行動に出づるやも知れませんが、何と言つても神に従ふ心が深いのですから、誠のメシヤが判りて來ましたら吃度其命に従ふものだと吾々は國民性の上から判断を致しまして、メシヤの再臨を待ち望んで居るので御座います。そして猶大人は世界を統一してシオン帝國を建設する事があつても、自ら帝王に成らうなどは夢想だも爲て居りません。只聖書の豫言を確信し、メシヤは東の空より雲に乗りて降臨すべきもの、又吾等の永遠に奉仕すべき帝王は日出の嶋より現はれ玉ふべきものたる事を確信して居りますよ。イスラエル民族は此信仰の下に數千年間の艱苦や迫害を忍んで來たのですからなア」

ブラバ「私はそのメシヤも帝王も皆高砂島にチャンと準備され、數千年の昔から今日の世のために保存されて在るといふことを信じて居ります。一天一地一君の治め玉ふ仁慈の神代は既に已に近づきつゝあるやうに思ひます。併しそれ迄には如何しても一つの大陸が世界に出現するだらうと思ひます」

スバ「なる程、我々も貴師と同意見です、天の神様がいよく地上に現はれて善惡正邪を立別け立直し玉ふは聖言の示したまふ所です。一日も早く身魂を研いて神心になり世の終りの準備にかゝらねば成りませぬ。そして高砂島からメシヤと帝王が現はれたまふと云ふ貴師の御説には私は少しも疑ませぬ。サア長らくお手を止めまして濟みませなんだ。如何です、一度アメリカンコロニーまで御足勞を願はれますまいか」

ブラバ「ハイ有難う御座います。然らば御言葉に従ひ御供を致しませう」

と僧院の監督に其旨を明かし置き、老紳士の跡に従つてコロニーへと進み行く。

(大正一二、七、一〇、舊五、二七、加藤明子録)

瑞 月

白雲の空打ちながめ思ふかな

聖の居ます國は何處ぞ

大空を仰ぎてまつも救世主

活動なくして如何で降らむ

## 第五章 至 聖 團 (二六三四)

ブラバースはスバツフォードに伴はれて、アメリカンコロニーへと歩を運んだ。百人ばかりの信者が、祭壇の前で一生涯命になつて祈願を凝らす最中であつたので、老紳士と共に末席の方から禮拜をなし、天下萬民の爲に一日も早く聖王の降臨されて神業を開きたまふ日の來れかしと祈りつゝあつた。

一同禮拜を終つて、珍らしき客のスバツフォードの傍に端座せるを見て不思議の眉をひそめて眺めて居る。スバツフォードは一同に向ひ、言葉靜に

スバ「皆さん、此御方は高砂島から神命を奉じて遙々お越しになつたブラバースと云ふ聖師ですよ。僧院ホテルに御宿泊の方だが、メシヤ再臨の先驅として御出張に

なつたのですから、お互に親しく交際をさして戴かうじやありませんか」

一同はこの言葉に生き復つた様な面色を浮べて、異口同音に「サンキウ〜」と連呼するのであつた。

ブラバースは一同に向ひ厚く禮を復し、且つ一場の挨拶的演説を始めかけた。

ブラバ「御一同様、私は最前聖師の御紹介下さつた如く、高砂島から神命を帯びてメシヤ再臨の先驅として派遣されましたルート、バハー團の宣傳使ブラバースと申す者で御座います。八千哩の海洋を渡り漸く昨日の夕方、尊きエルサレムの停車場へと安着いたしました處が、初めての當地の到着にて土地の勝手も分らず、如何にして橄欖山へ行かうかご心配しながら、夕暮の大道を歩んで居りますと、貴團の信者マリヤ様に圖らずも途中で御目に掛り、カトリックの僧院ホテルへ案内して頂きま

した上、夜分にも拘はらず市中の案内までして頂き、暮はしき橄欖山まで参拜さして貰いましたのは、全く貴團の公平無私にして克く神様の御心を體得し遊ばしたその賜に、深く感謝いたした次第で御座います。加ふるに御親切なるスバツフォード聖師までが、態々ホテルまで御訪問下さいまして、種々結構な御教訓を承はり、貴團の純なる信仰の模様と愛の結晶とも云ふべき美はしき生活の有様を拜聴しまして、感涙に咽びました。悪魔横行の暗黒なる世界にも、貴團の如き眞善美愛の聖なる團體が造られてあるかと思へば、神様の仁慈の大御心と周到なる御經綸には感謝せざるを得なく成つて参りました。私も今日は神様の仁愛の光に照らされまして、大神の愛の深く尊き事を悟りましたが、世界の人類はイザ知らず、私の出生した高砂島などは今より五十年前までは、御話するさへも耻かしい様な

状態で御座いました。基督の愛、孔子の仁、佛陀の慈悲など申す事は、私共に取つては非常に神秘的な了解し難い、到底凡人の手の届かぬ高遠なもの、様に教へられて来たもので御座います。各宗各教の宣教者が餘りに神佛の教に勿体を付け過ぎて、仁だの愛だの慈悲などの神理を此世の外のもの、様に仕て了つたのです。然るに天運循環の神律に由つて、神の御國と稱へられた極東の高砂島に嚴瑞二柱の救世主あらはれ玉ひて、高大博遠なる愛は私共に極めて手近いもの親しきものにして、日々の生活から放さうとしても放され得ないものと成つたのです。何と有難い尊いことで御座いませう。御一同様も、又愛の眞諦を能く體得遊ばされ、キリストの再臨を誠心誠意待望されつ、國籍と宗教の障壁を脱却して聖國を創立されました事は、天下萬民のために實に洪大無限の大神業だと考へまして、貴團の御精神のある事に

感謝措かない次第で御座います。自國の耻を申し上げるではありませんが、今日は國籍や宗教の如何に關係なく世界人類愛の上より御參考の爲一言申上げ度いと思ひます。貴國の方々と現今の若い人達には、殆き想像も出来ない程に我生國高砂島は三百諸侯の小さい敵國に分割されて居りましたのが、今より僅かに五十年前の狀態でありました。甲州と乙州とはおろか、同じ乙州でもアールとセンターに於ても、シエルとアンターとの間に於ても、全く敵國の狀態で、所謂郷關を一步出づるが最後、生命の保證が出来ない様な實狀で御座いました。そればかりか、各自腰に秋水を帯び家を出づれば男子は七人の敵有りと言悟して居るのが武士道の尊い處と謂はれ、神國魂の精華と知られて居りました。又武士は切捨御免と言つて、平民を切り殺す位なことは武士の普通の特權とさへ見られて居つたのです。現に今より三十

年前に有つても、甲州人とか乙州人とか言ふ言語には、如何にもヨソくしい意味を以て居つたのです。又今日と雖も官吏とか平民とか云ふ言葉には、一種の強固な障壁が築かれてある様な感じを興へて居ります。私共の父即ち維新の戦ひに参加した人達は、常に私共の子供の時代を見て、今日の青年や子供は大變に柔順になつたと言つて驚いた位です。私共の子供の時分はそれでも他の町村内の子供に對しては一種の敵意を持つて町村と町村との子供の喧嘩は餘り珍らしいものではありませんでした。他町村の子供を見て石瓦を投げ付け、怪我をさせて快哉を叫ぶ事などは普通の事と知られて居りました。それ位だから、維新前即ち三百諸侯の各地に割據して絶えず争つて居た時代は、中々殺伐なもので有つた事は、古老の談話を聞いて見れば驚かされる位であります。それが今日では子供の喧嘩でさへ頗る珍らしくな



つて來ました。町村の子供と町村の子供とが互に敵視する様なことは、今日の子供には想像が付かない様になりました。是は何の爲かと考へて見れば、高砂島の三百諸侯の我利々々連が一天萬乗の大君の思召によつて何れも前非を悔ひ、歸順の誠を輸して大君の下に畏服し、一切を投げ出して了つたからでありませう。それが爲に人心大に和らぎ、四方平等的精神が國民の間に貫流する様になつたので御座います。何が野蠻だと言つても、互に敵意を持つて争ふ程野蠻なことは有りません。故に野蠻人とは其親愛の範圍の極めて狭小なるものを意味し、文明人とは親愛の範圍の極めて廣大なるを意味するものとすれば、貴國の如きは實に世界に先んじて文明の中の大文明の花を開かせ玉ふたものと、衷心より感謝に堪へない次第で御座います。大慈大悲の大神様は全地上の世界をして、天國淨土と爲し、萬民に安息と榮

光を與へんが爲に三千年の御經綸を遊ばして、今や高砂島に聖跡を垂れ玉ひました。そして大神の元の御屋敷たる此のエルサレムに御降臨遊ばす、その準備として瑞の御魂の聖主を下し、萬民の罪を贖ひたまふこと、なつたので御座います。又神の選民たるイスラエル民族の方々が主唱者となつて各國の人々をこの聖地に集め、メシヤの再臨を信じてアメリカンコロニーの如き立派な殿堂を作られて居られる事は私に採りまして實に何とも言へぬ有難い嬉しい樂もしい事だか判りません。願はくは私もこの聖團員の一人に加へて頂きますれば、身の光榮是に過ぎませぬ。ア、惟神靈幸倍坐世」

と拍手の内に勇まし氣に降壇した。老紳士は直に登壇して

スバ「只今聖師の御話によつて、今回の聖地御出向も了解いたしました。この團員

も定めて、私と同じ御意見だと思ひます。個々分立して日に夜に争闘の絶間が無かつた云ふ高砂島が、今より五十年前に於て統一せられ、又嚴瑞二柱の救世主が現はれたまふたのも、メシヤ再臨世界一体の大神様の深遠なる御經綸で御座いませう。國內の凡ての障壁が取り除かる、事によつて、今日の向上と繁榮を來たす事になつた以上は、猶も進んで世界中が争闘を止めて相親愛し、各國各人種なき云ふ根本的敵愾心を取り去る事によつて、人類の文化は神聖なものとなり之と同時にその福利の程度も大變に高めらるゝこと疑なき眞理であります。要するに我々お互の親愛の範圍の大小によつて、野蠻ともなり文明ともなるのです。世界の平和を來さんがため、即ち五六七の神政出現のためには、各國々民間の有形と無形の大障壁を第一着に取り除かねば駄目です。この舉に出ずして世界の平和、五六

七神政の成就を夢みるは恰も器具を別々にして、水の融合を來さうとするものご一般の愚擧では有りますまいか。それ故、我々團体員は世界に率先して平和の眞諦を示し、メシヤ再臨の準備に従事して居るもので御座います。今日は高砂島の聖師の御來着によつて、私は神界の御經綸の洪大無邊なるに感喜の餘り、茲に一言蕪辭を述べ御挨拶に代へました。何うか團員諸氏もこの聖師と共に空前絶後の大神業の完成に盡されん事を希望いたします」

と悠然として演壇を下つた。團員一同は拍手してスバツフォード聖師の説に賛同し和氣緩々として堂に溢る、ばかりであつた。今迄うつむき勝で感涙に咽んで居た、マダラのマリヤは、やをら身を起してツカノ、演壇の上に立ち上り、謹嚴な態度を以て一場の演説を始めかけた。一同は拍手してマリヤの講演を迎へた。

マリヤ「妾は只今兩聖師の御演説を承はりまして、大に心強く感じました。海洋萬里の遠方から遙々御越しになり、エルサレムの停車場前の街路に於て妾と會合されました事は實に奇蹟中の奇蹟だと考へます。ブラバース様は全く神様の御使命を帯びメシヤ再臨の先驅として御光來になつた事は寸毫も疑ふ餘地は御座いませぬ。妾は皆さんと共に世界萬民の爲に、聖師の光臨を祝し且つ滿腔の喜悅に堪へないので御座います。メシヤの降臨キリストの再臨、五六七神政成就とは名稱こそ變つて居りますが、要するに同じ意味だと考へます、斯る目出度き世界になるのも全く神様の御經綸で御座いますが、その神業に奉仕する生宮が現はれなくては成りません。先づ第一に神の子神の生宮たる我々は、世界にあらゆる有形無形この二つの大なる障壁を取り除かねばなりません。有形的障害の最大なるものは對外的戰備（警察的武

備は別）と國家的領土の閉鎖とであります。又無形の障壁の最大なるものは、即ち國民及び人種間の敵愾心だと思ひます。又宗教團と宗教團との間の敵愾心だと思ひます。此世界的の有形の大障壁を除く爲には先づ無形の障壁から取り除いて掛らねば成らないと思ひます。聖キリストは天國は爾曹の内に在りと言はれて居ます。聖アブデユル、バハは世界の平和の人々の心の内に建てられねば成らぬと教へられて居ます。佛陀は慈悲の心を十方世界に擴めて限界を設けるなと教へられて居ます。ツルク聖主の御示教も先づ第一に世界人類の和合を以て五六七神政成就の絶對條件として居られます。神聖と精神とが靈的と申すことは、別に不可思議な神秘なものでは無く、人類愛の心即ち他の國民や人種に對して少しの障壁も築かず、胸襟を披いて自分の友人に對すると同様に友愛の心を持つ事で御座います。この障

壁をなす唯一の根元は自己心と自我心です。幸に我聖團は自己自愛の心を脱却し  
唯何事も大神様の御心に任す人々の集まりで御座いますから、大神様も御嘉賞遊ば  
して遙々と高砂島から聖師を招き、我々の聖團に與へて下さつたものと厚く深く感  
謝する次第であります。アーメン」  
マリヤ茲まで演じ了り、一同に向つて軽く一禮しながら壇を降る。拍手の聲は急峻  
の如く場の外まで響き渡つて居る。

ア、惟神靈幸倍坐世

(大正二二、七、一〇、舊五、二七、北村隆光録)

第二篇 聖地巡拜

## 第六章 偶

像

都 (一六三五)

ブラバース、マリヤの二人は又もやエルサレムの市街を巡覽し始め、市内で一番重要なモニュメントになつて居る聖セバルタル寺院を見るべく寺門を潜つた。

マリヤ「聖師様、此お寺は聖キリスト様を磔刑に處した場所で、ゴルゴタの地の上に建てられてあるのだと傳へられて居りますが、併し聖書に由つて考へて見ると、ゴルゴタは市の外部に存在して居なければ成らぬ筈です。若しも現在の城壁が當時のものよりも擴張して居るものとすれば、問題にも成り得るでせうが、同一の場所においてとすれば、ダマスカスの門の外にある一見頭骸骨状の目下墓地になつて居る岩丘を以て、ゴルゴタの地と認めなければ成らないと思ひますわ」

ブラバ「我々人間としては到底眞偽は判りませぬ。大聖主が御降臨の上御定めなさることでせう。時にこの寺院の由來を聞かして頂き度いものですな」

マリヤ「このお寺の由來を申せば、コンスタンチン帝の命令に由つて發掘された結果、キリスト様の埋葬され遊ばした洞窟が發見せられましたので、帝の母上なる聖ヘレナ様がエルサレムに巡禮して來られ、爰でキリストの十字架を發見しられたので、彌この地をゴルゴタの聖蹟と認めて、紀元三百三十六年初めてこゝに寺院を建立されたと云ふことですが、それを又六百十四年に波斯人のために焼亡ほされた爲、直に改築をされましたと云ふことです。その後にも幾度もなく破壊改築修繕等相次ぎ今日に至つたのだと聞いて居ります。一度お寺の内部を拜觀なさいませんか。妾が御案内いたしますから」

ブラバ「ハイ有難う」

マリヤの後より寺内へ深く進み入る。

寺院内へ這入つて見ると、迷宮の様な構造で随分複雑して居て、加ふるに太陽の光線が十分徹らない薄暗闇で何んもなく寂しい感じがする。それ／＼手に蠟燭を携帯せなければ成らなくなつて居る。寺内の空氣は重くしめり勝で餘り氣分の良い所ではない敷石は全部濕氣で濡れて居るため、ウカ／＼して居ると脚下が這つて轉倒せんとすること屢である。平和にして清潔なるものは寺院だと思つて居た高砂島の明るい生活に馴れたブラバの心を取つては意外の感じに襲はれ、危険がチク／＼と身に迫る様に何もなく不安の雲に包まれるのであつた。

外のユダヤ人街から來るのか、内部から發したのか知らぬが、一種異様の厭な臭氣

が襲つて来る。そして内部は凡てキリストの磔刑に關するあらゆる由緒ある場所に由つて充されて居て、何もなく物悲しい寂しい感じを與へる。精霊が入嚮を越えて地獄の入口に達した時の様な気分になつて来る。

マリヤはブラバースを顧みながら初めて口を開き、さも愁た氣に

マリヤ「聖師様、この長方形の石はニコデモがキリスト様の體に油の布を以て捲くために御身體をのせたに傳へられるもので御座います。これがヨセフの墓で此方がアリマヂエの墓で、その少し向ふにあるのはニコデモの墓で御座いますよ。そして彼所がキリストの復活された後母の眼に現はれたまふたといふ聖所ですよ」

キリストを刺した鎗、キリストを投入した牢獄、兵卒がキリストの衣をわかつた場所など一々叮嚀に指し示すのであつた。

ブラバ「天下萬民のために犠牲にお成り下さつた救世主の御遺跡を拜觀いたしました、何とも言ひ得ない程私は御神徳を頂きました。何時の世にも善人は俗惡世界の人間から迫害されるに云ふ事は古今一徹ですな。ルート、バハの大神主も肉體こそ保存されて在りますが、精神的に牢獄に投げ込まれ銃劍にて突刺され、あらゆる社會の侮辱と嘲罵を浴びせられ、且つ大惡人の如く扱はれて居られますが、何うか一日も早く天晴れ世界の人類が眞の救世主を認める様になつて欲しいもので御座いますよ。ツクル大神主の墓は〇〇の手に暴破れ聖壇は破壊され數多の聖教徒は壓迫に堪へ兼ねて四方に離散し、今は純信な神に生命を捧げたものばかりが殉教的精神を以てウツンバラ、チャンダー聖主夫妻を唯一の力に頼んで、天下萬民のために熱烈なる信仰を續けて居るのです。ア、惟神靈幸倍坐世」

マリヤは涙に暮れながら、聖師の先に立つてキリストの十字架を建てた正確な地点や聖母のマリヤが十字架から降ろされたキリストの亡骸を受取つた場所を案内するのであつた。是等の地点には、それ／＼それに因んだ名を附したチャベル（拜禮堂）が設けられてあつた。

マリヤ「是がアダムの墓で御座いますが、一番に聖地でも不思議と呼ばれて居ります。

そしてキリストの聖き御血が岩の裂れ目からその頭に浸み込むや否や、この原人アダムは忽ち蘇生したと言ひ傳へられて居るのですよ」

と少しく怪し氣に笑つて居る。

ブラバースは感慨無量の思ひに充ちて一言も發せず、マリヤの後から心臓の動悸を高め乍ら従いて行く。寺院の東の端の方には聖ヘレナの禮拜堂が建つて居る。北の神

壇はキリストと共に十字架に釘付けられた一人の悔改めたる盗人のために捧けられたものだ／＼傳へて居る。主なる神壇は皇后聖ヘレナの爲に捧けられたもの／＼傳へられて居る。その側面を地下へ十三段下つた處に、又十字架發見のチャベルが建てられて居る。茲に聖ヘレナが夢の啓示に由つて三つの十字架を發見したと云ふ。

マリヤ「聖ヘレナ様が夢の啓示に由つて三つの十字架を發見されました、爰にチャベルをお建てになつたのですが、その發見された三つの内でも何れがキリストの架けられた十字架だか分らなかつたので、そこで一つ／＼大病人に觸れさせて試みた所、その中の一つが病人を癒したのでそれをキリストのものとして保存されてあると云ふ事で御座います。そしてキリストの縛り付けられなかつた圓柱が在るのですが、併しそれは神壇の壁の奥に深く隠れて居るので容易に拜することは出来ないのです



所がその壁には丸い穴があいて居て、信心の深い禮拜者はそこにおいてある摺小木様の棒をその穴に差し込み、その圓柱にふれて棒に接吻するのです。サア是からキリスト様の御墓を御案内申し上げませう」

「マリヤは前導に立ちて奥へへへ進み入る。

寺の中央に獨立した長方形の大理石で造られたキリストの墓の前についた。兩人は恭敬禮拜稍久しふして救世主を追慕する念に打たれ、思はず知らず落涙して居る。澤山な古風を帯た燭燈に由つて照され、十八本の柱から成つた圓形の建築の中に置かれてある。そこに一人の番僧が居て、

番僧「良くこそ御參拜に成りました。さうかキリスト様の御墓へ御賽錢をお上げ成さいませ。後生のため現世の幸福のためで御座います」

と抜目なき言葉でお賽錢を強要して居る。

ブラバ「サは心の内にて

「ア、聖キリスト様もお氣の毒だ。賤しき番僧等の糊口の種に使はれたまふか。

世は實に澆季末法だなア」

と歎息しながら懷中を探つて少しばかりの賽錢を墓の前に捧げた。番僧は餓虎の如く其場で賽錢を拾ひ上げ、懷中へ隠して了つた。

マリヤ「この寺院内の各種のチャベルや墓や、神壇や其他寺内の各部分、又は聖き墓を照して居るランプに至るまで、ギリシヤ、オルソドックス及びローマ、カトリックや其他アルメニヤ派の間にそれ々々所有がきまつて居るのです。それは此お寺ばかりでは無く、エルサレムの内外に散在して居る宗教上の由緒ある場所に付いても同

様です。實に皮肉なアイロニーがありませんか。そしてこのお寺が彼の有名な十字軍の戦争の目的物であつたのです、「聖墓を記憶せよ」この聲は、第二回十字軍の出征に際して歐羅巴諸國の町々や村落を通じての叫びだつたので御座います」

ブラバ「歐洲の國々が聖墓を慕つて十字軍まで起した時代は、その信仰も至つて熱烈なものだつた様ですが、今日では最早信仰も墮落して了つて物質的觀念のみ盛んになつて來ました爲に、斯る聖地の聖蹟も餘り世人に顧みられない様ですなア。時節には神も叶はんミルト、バハの教にも示されて在りますが、一時も早く聖キリストの再臨されて聖地をして太古の隆盛に復活させ、世界萬民を安養淨土の悦樂に浴せしめ、キリストの恩恵を悟らせ度きものですなア」

マリヤ「左様で御座います。妾の加入して居ます聖團は只々キリスト、メシヤの再臨のみを待つて居るのです。一時も早く高砂島にやらに再誕されたメシヤの此地に再臨して下さる事が待ち遠しく成つて參りましたわ」

是より兩人は寺門を出て市街を歩行し初めた。肉屋や野菜物店や、其他土地にふさはしい物を賣つて居る雜貨店等が、みつしりと軒を並べて居る狭いオリエンタルな通りを過ぎて所謂「苦痛の路」へ出た。

マリヤ「聖師様、こゝは苦痛の路と謂つてキリスト様がピラトの宮殿からゴルゴタの地即ち今の聖セバルクル迄歩ませられたと傳ふる舊蹟で御座います。そして此路の上には十四の地點が指定されてあります。サア是から一々御案内申しませう」

と前に立ち進む。

ブラバ「サは『成る程』』となつて、趣味深く味はひながらついて行く。

マリヤ「爰がキリスト様が磔刑の宣告を受けたまふた悲しい場所で御座います。その次が十字架を負はせ奉つた場所です。この東側のチャベルを拜して御覽なさいませ。

其時の光景がチャンと浮彫で以て現はしてあります」

と話しながらツン／＼と歩みを進め、

マリヤ「爰がキリスト様が母上様に會見遊ばした所で、熱烈な信徒の立止まつて動かない地點で御座います。彼所に「此人を見よ」のアーチが御座いませう。あれはピラトの訊問を受けた後にキリスト様がユダヤ人の群衆の前に引出され種々の迫害と嘲罵を受けたまふた所です」

と涙ぐまし氣にそろ／＼と歩みながら、後ふり返つてはブラバーサの顔を見詰めて、

マリヤ「イエス荆の冕を被ぶり紫の袍を着て外に出づ。ピラト彼等に曰ひけるは

「見よ是人の子也」と馬太傳に誌されてある事實で、キリスト様が二度目に倒れたまふた地點は爰だ」と云ふ事です。そしてキリスト様に従つて來た話された地點は爰ですわ。このチャベルにちやんと彫込んであります」

と叮嚀親切に案内した。

米

米

米

米

米

キリスト教の偶像を以て飾られたる聖地エルサレムは、異教徒の場合よりも勝つてブラバーサの心を痛めしめたのは、後世の僧侶輩が聖書に録された一々の場所や由緒などを捏造して、巡禮者の財布をねらつて居ることである。一寸見ると單純なる信仰の發露だらうと、神直日大直日に見直し開直し宣り直すことも我々に採つては出來得ない事も無いが、一般の信仰なき民衆やデモ基督教徒の眼には却て不快に感ずるも

のたる事を恐れたのである。又後世の僧侶や信者がその内部的知識に空なるがため、外部に徴を求めんとして居る事の嘆すべき一つの證據では有るまいか。ア、後世まで唯一の遺寶たる福音書の中に彼れ自身の姿を認め、それから靈泉を汲み得ることの出來ない信徒等の心の淋しさより、斯様な偶像を作り出してせめてもの慰安の料にして居るのでは有るまいか、なぞも又も心の内にて長大嘆息をして居る。

マリヤ「聖師様、澤山の偶像的事物を御覽になつて非常に嘆息されて居る様で御座います。何時の世にも聖キリスト様は正しくは信仰され、又理解されなかつた様で御座います。キリスト様が迫害されなかつた當時も、今日を問はず、世間から誤解されて居られます。そして普く世界から崇敬され玉ふ様になつた後の世は眞のキリスト様では無くて人間が勝手にキリスト様に似せて作つた偶像を崇め、キリスト教

そのものを信ずる代りに、それから流れ出づる美しい果實のみを夫と誤認して了ひ終にキリスト教は肝心の精神を失ひ神の國の教である代りにそれは良き意味に於てはありますが、地上の幸福をもたらず手段と墮落して了つたので御座います。夫れゆへ妾も此の聖地が偶像のみにて充たされ飾られ、眞のキリスト様を認識し得ない事の矛盾を悲しむので御座います」

と悔みながらマリヤは猶も市中を歩み續ける。

(大正一二、七、一一、舊五、二八、加藤明子録)

瑞 月

三五の月の再び世に出づる

足世を松の心床しき

## 第七章 巡禮者 (二六三六)

マリヤは再び寺院を辭して、ユダヤ人クオーターの西端なる所謂ユダヤ人「慟哭の壁」を見に行かうでは有りますまいかミブラバーサを顧みた。ブラバーサは餘り氣乗りがせなかつたけれども、折角の案内でもあり又一度は参考のために是非調べて置きたいと思つたのでマリヤに一任して従いて行く。荒い大きい石で築き上げた壁の間を迷宮の様に廻つて行くに「神殿の廣場」のふもとの丈の高い壁に突き當つた。石疊になつた路は壁に引添ふて三十間ばかり走つて居て、其先はピタツと行詰りになつて居る。其周圍は何となく恐ろしい様な氣味の悪い感じを與へる。茲でユダヤ人は滅亡したエルサレムの爲に聲を限りに號泣するのである。何時も幾何かのユダヤ人が爰に出

て來て、頻りに祈禱を捧げたり聖書を拜誦してユダヤ民族の過去の光榮を思ひ浮かべて泣くのである。そして金曜日と土曜日との夕刻には、最も多人數が集まつて來るのである。又ベツスオウー（渝越節）の様なユダヤ人の祭典日には、老若男女凡ての階級の人々が集まつてその中の長老らしきものが、

壞たれたる宮のために

と歌ふと群集は異口同音に

我等はひとり坐して泣く

と答へて歌ふ其有様は、實に物凄いい感じを兩人の心に與へた。また

毀たれたる宮のために

潰れたる城壁のために

過ぎ去りし偉大のために

われ等は死せる偉人のために

焼かれたる寶玉のために

云ふ風に謠ふに群衆は同じ様に

われ等はひそり坐して泣く

と答へて涙を搾つて居る。

壁にはユダヤ時代、ローマ時代、アラブ時代に築き上げられた部分が見分けられて、一番下層の大石はユダヤ時代の物だと傳へられて居る。それ等の年代と人々の觸接との關係とに由つて非常に黒ずんで汚なくなり、その表面にヘブリユの文字が無數に書き録されてある。またその大石には方々に澤山の釘が打込んであるが、是

等は諸國に散在して居る信仰強きユダヤ人が祖先の地を訪れて遙々と爰に來た時に打込んだ釘で、それが石に確りと刺つて居れば居るほど、神様が彼等を捕へて居らるゝことが確だとの信仰に基づくものである。

兩人は爰に佇立して往時の追懐に耽つて居た。そこへ十二三人の人が集まつて來て其壁に頭をつけて接吻し初め出した。ブラバースは此態を見て一種名狀すべからざる感じに襲はれた。それは勿論宗教的のものでも無く、また憐愍や同情に由來するものでも無く、また普通のキリスト教徒のユダヤ人に對して持つて居る反感から來る應報的感じでは勿論ない。それは氣味悪い程根深いもので、たとへば執拗な運命に對する恐れでも言つたら良きそんな本能的のものである。この光景を見た兩人は、他の英米人のやうに微笑しながら平氣で彼等の動作を見つゞけたり、其光景を撮影したりする

様な事は到底出来ない悲哀に閉ざされて了つた。一分間と雖もそこに立止まつて傍觀するに堪へずなり、仔細に其有様や壁なきの歴史的構造にも注目してゐる暇なく、顔を背けてマリヤと共にその場を逸早く立去つた。

爰は實にエルサレムに於ける最も深刻味の湧いて來る場所である。「永劫のユダヤ人」と云ふ聲が何處からともなく耳に響いて來る。是等の干涸びた老人等は、何れもアブラハムの裔ダビデの裔である神より選ばれたるイスラエル民族の代表者である彼等の中から全人類の救ひ主イエス、キリストが生れたまふたのだ。彼等は二千六百年の間、祖先の光榮と正反對に人の世の中の一掃攘斥せられ、輕蔑せらるゝものとして、その落付くべき祖國を持たずして世界を漂浪して居たのである。歐洲大戰後このパレスチナの故國は漸くユダヤ人のものと成つたが、未だ世界に漂浪して居るものが

その大部分を占めて居るといふ有様である。是もキリストを十字架に付けた彼等の祖先の罪業の報いとも言ふべきものだらうか。夫れにしては餘り殘酷過ぎると思ふ。キリストを釘付けにしたのは彼等ばかりで無く、人類全體なのである。キリストを救世主と仰がなかつたものは彼ユダヤ人ばかりで無く、世界人類の大多數である。聖書の豫言にかなはせんが爲には云へ、餘りに可哀相だ。彼等はキリストの懷に歸つて罪の赦しを乞ふこと無しに、何時までメシヤを待望して世界を放浪するのであらうか。それにしてもアメリカンコロニーの人達は、早くも目を醒ましてユダヤ人にも似ずキリストの再臨を神妙に生命、財産その他一切を捧げて待つて居る信念の力の強いのは、感激の至りだ。ミブラバーサの心は忽ちコロニーへ走つて了つた。

マリヤに導かれて「汚物の門」を出で、シロアムの谷を見下ろし乍ら城壁に添ふて

歩み出した。キリストが冒者の目を癒されたシロアムの池や、バアージンが水を汲んだ泉や、ユダがキリストを賣つた金で買ひ求めた「血の畑」や、そのくびれた木などの所在を案内されつゝ、ダビデ王の墓の在る所からシオンの門に入り、ダビデ塔の下を通つて漸くマリヤと共に一先づカトリックの僧院ホテルに歸つて息を休め、夕餉を済ませることにした。

ホテルの食卓では英米人四五人と同席せなければ成らなかつた。紳士を装つて威厳を振した長い沈黙と、無意味なあたり障りの無い會話には流石のブラバーサも堪へ得られなくなり、今親切に二度までも案内して呉れたユダヤの婦人マリヤとの對照を思つて、宗教信者と非信者との温情の程度に雲泥の相違あることを感得したのである。食堂の何十と云ふ顔の何れを見ても、本當の信仰に燃え立つた巡禮の心に驅られて

この聖地に參つて居ると思ふやうな人は一人も見ることが出来なかつた。彼等は何れも物見遊山のの心でやつて来て、萬事に贅澤を盡し、六コースもある様な食事を一日に二度もしながら、それに自ら疑問を抱き謙遜な心持になる事なしに、満足し切つて盲滅法的に暮して居る醉生夢死の徒とよりは見ななかつた。

ブラバーサは曾て耽讀した「二人の巡禮者」と云ふトルストイの童話を思ひ出して、なつかしきには居られなかつた。二人の敬虔なロシアの百姓は一生かゝつて其目的のために働いて貯けた金で聖地の巡禮に出かけたが、其中の一人は途中で不圖したところから一家全體が疫病になやんだ。他の一人は途すがら全家擧つて疫病にかゝつて居た不幸な全員を介抱し初めた爲に、友とはぐれて旅費に持つて來た金はその爲に残らず使つて了ひ、結局目的の巡禮を爲し遂げずして故郷に歸つた。第一の巡禮者は彼の友



に逢つて巡禮をしなかつた彼の友の方が、自分よりも却て本當の巡禮者であつたことを認めたこと云ふ文句を心中に繰返しつつ、食卓を離れて我居間に歸り、長椅子の上に横たはつた。マリヤは又もや例の歸神氣分になり、ブラバーサに輕く挨拶を交はし、周章で再會を約し乍らアメリカンコロニーをさして歸り行く。

ブラバーサは大神の神號を唱へ天津祝詞を奏上し終り、窓外の家々の薄明かるい燈火を見下ろしながら、草臥てソファの上に白川夜舟を漕ぐことゝなつた。

(大正一一、七、一一、舊五、二八、北村隆光録)

瑞 月

三五の月は何處にかくれたる

諸木の茂る深き谷間に

## 第八章 自動車 (一六三七)

マリヤはその翌早朝から又もやブラバーサを訪問して、聖地エルサレム市街附近の案内を爲すべく、愴惶として僧院ホテルへやつて來た。ブラバーサも聖地附近の様子を一應調査しておく必要もあり、高砂島の故國へも報告せなくては成らないので、此婦人の親切な案内振を非常に感謝の誠意を以て迎へたのである。マリヤもブラバーサの人格には非常に尊敬の念を拂つて居た。獨身者のマリヤに取つては實にブラバーサこそ唯一の心の友であり力となるのであつた。

ブラバーサは今日も早朝からマリヤに導かれて、聖地の巡覽にホテルを立ち出づる事となつた。ジャツファ門外から出發する乗合自動車でベツレヘムに往復する事とし

た。自動車は土埃を立てながらゲヘンナの谷へ降りて行く。

元はエルサレムの市の西南にあつて、北はシオンの山、南は岡で以て區劃された深い細長い谷である。此處は昔ユダヤとベニヤミン族の境になつて居て、ソロモン以後こゝで恐ろしい人の犠牲が行はれたが、その後は死體や市の汚穢物を捨てる場所になつて了つたのである。悪人の運命に付けて「ゲヘンナに投げ入れらるべし」と云はれて居るのは即ち此處である。

急がしく馳走しつゝ、自動車は高みになつた豊饒な平野を横きる。古い橄欖樹の植わつた野や小丘である。道路は九十九折になつて、緩勾配の坂道を上つて行く、左手の遠方に前景ときはだつて違つた長い一列の山脈が見える。その麓の深き所に、竹熊の終焉所なる有名な死海が照つて居るのである。

自動車が小高い丘の上に来たので、窓から首を出して眺めるに死海の面が強烈な太陽の光を受けてキラ／＼と輝いて居るのが見える。驢馬や駱駝に乗つた田舎人の群が幾組ともなく通つて居る。

自動車を丘の上に停めて、ブラバースとマリヤの二人は四方の景色を瞰下しながら沿道の色々の傳説や場所についで問答を始め出した。

ブラバ 「マリヤ様、聖地附近の色々の歴史や傳説を聞かして頂きたいものですなア」  
マリヤ 「この丘の上で四方を見晴らしながら、聖地案内の物語も又一興だと思ひます。

妾が記憶の限り申上げませう。傳説や口碑と云ふものは随分間違つた事が多いものですから、万一間違つて居りましてそれは妾の責任では御座いません。傳説や口碑が悪いのですから」

ブラバ「ハイ承知致しました。何分宜敷くお願いいたしませう」  
マリヤ「有名なマヂの泉から發端として申し上げます。マヂの泉は一名マリヤの泉と云つて居ます。その前の名の由來は幼兒キリストを拜すべく、星の導きを便りに遙々尋ねて來た東方の博士等は爰まで來て其星を見失ひ、途方に暮れて居たところ、この井戸の水を汲み、疲勞を癒やさんと立止まつた時に、案内に立つた星が泉の水に反映して居るのを見付け、歡喜に充されて彼等は再びこれに従つて進んだのでマヂの泉と稱へられたと云ひます。第二の名は聖なる家族がベツレヘムの道に爰に息つたと想像される處から、マリヤの泉と稱へられたと傳はつて居るので御座います。またこの丘を下る途中の右側の小石が無數に澤山ゴロ付いて居る小豆の原が御座いますが、傳説に據るとキリストが或時この場所を御通りになると、一人の野良男が

畑で働いて居たので、キリストがお前は今何を蒔いて居るかと問はれたら、彼の男は豆を蒔いて居ながら石を蒔いて居るのだと答へた、それから後收穫時になつて彼の男は豆の代りに石ばかりを收穫しなければ成らなかつたと云ふ事で御座います」  
ブラバ「高砂島にも空海の事蹟に就て石芋などの傳説もあります。凡て傳説と云ふものは古今東西相似のもの、多いのは不可思議と云ふより外はありません。何かこの小豆ヶ原にも神秘的の意味が含まれて在るのかも知れませんが、傳説だと云つて餘り馬鹿にも成りますまい。アハ、時にマリヤの泉に映つた星は、高砂島に今日も現はれて玉の井の水に影をうつし、萬民の罪穢を洗ひ清めて居られます。私はこのマリヤの泉の御話を聞いて何となく崇高偉大なる瑞の御魂の聖主の傍が偲ばれてなりませんわ。一度玉の井の水を汲み取るものは、直ちに天國の門に進み得る

「良い手藝に取り付くことが出来るのです」

マリヤ「ウツンバラチャンダー聖主が一日も早くこの聖地に降臨されて、靈の清水にかはいた我々に生命の露の恵みを與へ玉ふ日が待ち遠うしく御座います」

ブラバ「マリヤ様、有名なラケルの墓は何れの方面に御座いますか」

マリヤ「ラケルの墓ですか。それはこの道端の小さい近代的の建築物であります。ここにヤコブが愛妻の亡骸を葬つたと傳へられて居ります。それよりも美しい物語のこつて居るのはダビデの泉ですわ」

ブラバ「その美しい物語を拜聴いたしたいものですなア」

マリヤ「或る時ダビデが敵軍に取り圍まれ、疲れ果て、彼の故郷なるベツレヘムの門外にゐる此清泉の一杯の水を渴望して止まなかつた。所が忠實なる部下の一人がダビ

デのこの泉水を渴望して居る事を探知して、黙つて一人で出かけて非常なる危険を冒した後、漸く少しばかりの水を汲んで歸つて來たのです。ダビデは部下のものが自分に對する真心の愛から、種々の危険を賭してこの靈水を汲み得て歸つて來たその辛苦を思ふて、その水をば一介の人間の飲み物にするには餘り勿體ないから神様の供物にせんじ、恭しく神に感謝を捧げた上、大地にそ、いで了つたと云ひ傳へて居ります。信仰も其處まで行かないと駄目ですなア」

ブラバ「信仰の力は山嶽をも移すとか申しまして、世の中に信仰心ほぎ強く清く且つ尊いものは有りませんなア」

マリヤ「左様です、信仰の力ほぎ偉大なものは有りませんなわ。妾だつて三十の坂を越へ乍ら未だセリバシー生活に甘んじて居りますのも、依然信仰心のためですもの。ベ

ツレヘムの町が幾つもの丘の上に美しく位して居りますが、彼は世界に於ける最も小さきものごしられて居ります。併しながら妾は決して小さきものごは思ひません何故ならば信仰の對照物いな御本尊なるエスキリストを、イスラエル民族のみならず世界人類救ひのために主を産み出しましたからです」

ブラバ「如何にも救世主を現はしたこのパレスチナの聖地は偉大です。いな莊嚴味が津々として湧くやうです。再臨のキリストを出した綾の聖地も亦、偉大と云はねばなりませんわ」

マリヤ「この聖地には近代的の教會やホスピースや僧院が諸所に澤山建つて居りましてまだ古いユダヤ人街が彼方此方に残つて居りますので、妾はそこを通行する度毎にキリストの當時を偲ぶので御座います。アレ彼の通り、往來の真中に駱駝が

呑氣さうに寝そべつて噛みなほしをやつて居ます。サア是から車は止めにして、徐々テクル事に致しませうか。自動車で素通りばかり致しましても餘り有益な研學にもなりませんからなア」

ブラバ「サは何事も一切マリヤに任して居たので、言ふが儘にマリヤの後から従いて行くのであつた。二人は後になり前になりしながら道を行くに、相貌の品の良いユダヤ人に幾人も出逢ふた。

ブラバ「サは心の中にて

「成程イスラエルの流れを汲んだユダヤ人は何處ごもなしに氣品の高い、犯し難い處がある、是では神の選民だと言つても餘り過言では無い。我身は名に負ふ高砂の神の國から遙々出て來たものだが、神の選民と稱するユダヤ人の氣品の高い所を見

て、何だか俄にエダヤ人崇敬の気分が頭を掻けて來さうだ。そして神の獨子と稱するキリストの聖跡を尋ねて居る自分は、層一層神様より重大なる使命を與へられて居るやうだ」

と心に種々の感想を抱いて居る。

マリヤ「聖師様、聖地に於て第一番に見るべきものが御座います。それは聖誕の場所に建てられたと稱して居る『聖誕の寺院』です。是から其寺院へ拜觀に参りませう。現今には、ローマ、カトリックやギリシヤ、オルソドックスやアルメニヤ教會の分有に成つて居ます。そして此寺院も昔にコンスタン帝が建立されたものだと言ふことです。その當時は金銀や大理石やモザイクで贅澤に飾られて居たさうです。今ではモザイクが少しばかり残つて居りますが、妙に冷やかな荒廢した厭な感じ

を與へます」

と云ひながら、漸くにして寺の門前に着いた。

背の低い、肩先までも届かぬ様な長方形の石の入口を潜ると、コリント式のカピタルを持つた十本づつ、四列の圓柱が寺院の内部を仕切つて居て、質素な様だが何んなく莊嚴な感じがする。このパシリクは實に現在に残つて居るキリスト教の建築物の中では最も古きものだらうと謂はれて居るのである。大神壇の下には聖誕の洞窟があつて、チャベルに造られ三十二箇の小さいランプで薄暗く照らされてゐる。誕生の地點は神壇の下に大理石を据へ、其上を銀の浮彫でキリスト聖誕の地と云ふ事が録されてある。この地點は聖地における他の何れの場所よりもズツと古くして、最も信憑に足ると云ふことである。何故なればこの場所は紀元前四世紀の頃に生きて居た聖ジエロ

ームよりも、二百年以上も前から既にキリスト教徒に由つて非常に畏敬されて居たからである。

其他寺院の地下には色々な由緒を附したチャベルが散在してゐる。馬槽のチャベルもその一つである。その馬槽は大理石で立派なものが出来て居るが、幼児キリストがその中に置かれたマヂ禮拜の神壇—幼児のチャベル—その場所へ母達が隠しておいた幼児をヘロデが殺さしめた聖ヨセフのチャベル—その場所で彼がエヂプトに避難せよこの夢の啓示を受けた。その他聖ジエロームの住居であつた所に設けられたジエロームのチャベル、及び岩の中に掘られたこの聖者の墓なきが默然として三千年の昔を物語つて居る。

(大正二二、七、一一、舊五、二八、加藤明子録)

第九章 膝 栗 毛(一六三八)

この寺院の東南の方、少し隔たつて「乳の洞窟」と云ふのがある。これもチャベルに成つて居て、入口の上に聖母が幼児キリストに乳を香ませて居る立像が置かれてゐる。傳説に由れば、このチャベルの洞穴に聖なる家族が隠れたと云ふ。聖母の乳の滴りが今でも洞穴の石灰石に印せられて居る。婦女がそれへ參詣をすれば乳が良く出る様になるに信じられてゐる。

兩人は寺院を辭して少しく先へ進んだ。そうすると、ヨルダンの谷に向つた方面の廣い眺望が展開する橄欖の樹の植はつた平野……それは「羊飼の野」といふ名稱が附せられてゐる。天界の天使が羊飼にあらはれて、

「われ萬民に關はりたる大なるよろこびの音信を爾曹に告ぐべし」  
とてキリストの降誕を告げ、多くの天軍が天の使と俱に、

「天上にこそころには榮光神にあれ。地には平安、人には恩澤あれ」

と神を讚美し、羊飼達がベツレヘムへ急いだのは、此の邊りだと言はれてゐるがこの話しに應はしい美しい氣分の良い場所である。場所の眞偽は問題となすに及ばぬ、假令少々違つて居つても、此所であつた事にしておき度いものだ。ブラバサは心の中に思ふのであつた。

兩人は同じ道を歩んでエルサレム市街のホテルへ歸らうとする時、今まで清朗なりし大空は俄に墨を流した如く眞黒になつた。兩人は世の終りの近づいた様な氣分に襲はれて居ると、ノアの大洪水を思ひ出させるやうな大雨が土砂降りに降つて來て容易

に止みさうにもない。然し暫時の間に雨は小さく成つて稍安心する事を得た。斯んな事なら自動車を返さなかつたが宜かつたに、今更の如く後悔しても後の祭りであつた。この大雨は恐らく半年の日照りの終りを劃する祝福された最初の慈雨であつたに相違ない。雨が止むと紅塵萬丈の往來は、スツカリ洗つた様に爽快な坦道と變つて了つた。丘の上にはエルサレムの市街が雨あがりの空に其美しい姿を現はしてゐる。天の一方の嵐の名殘の雲には、エホバの御約束の證據とも稱ふべき虹が美はしく七色に映れて高く長くかつて居る。ブラバサは

「われ聖域なる新しきエルサレム備へ整ひ、神の所を出で天より降るを見る。その状は新婦新郎を迎へん爲に飾りたるが如し」

とある默示録の言を心の中に繰返すのであつた。次で兩人は雨の晴れたるを幸ひとし



て、勇氣を鼓して又もやハラム、エク、ケリフの神殿を拜観せん。歩を運ぶのであつた。エルサレムの町の東南隅キドロンの谷を隔て、橄欖山に面して居る長方形の場所に着いた。今この廣場には回々教の二つのモスクが建てられてある。昔ダビデが神壇を設けたのもやはり此處である。

「彼はこゝに莊嚴無比なる大神殿を建築する心算で、澤山な建築の材料まで蒐集したが、尊き清き神の宮殿を建てるには平和仁愛の人で無くては神慮に叶はないのに、彼は戦ひの人として多くの血を流したので神様から其任でないとして差止められ、其子のソロモンが初めて父の準備しておいた豊富な材料を以て七ヶ年の日子を費やして、神殿及び外圍ひや内庭並びに僧院を完成することゝなつた。その他に彼は十三ヶ年もかゝつて附近の地を卜し、自分のために一つ、猶それに面して自分の

妻ファラオの娘のためにも一つの宮殿を建てたのである。僧院はソロモン時代の神殿の廣場を取り圍んで居た。外壁には東に黄金門あり、南に單門、二重門及び三重門が付いて居たと云ふ。其外に猶エルサレムの城壁が在つたのだが、今日の處では跡方も無き有様である。ダビデは主のために建てらるべき宮は比類なく莊麗にして、萬國を通じての光榮で無ければ成らぬと言つて居たが、ソロモンの建てた神殿は實にダビデの言つた通りの莊麗な宮殿であつた。この神聖なる丘の上に純白な大理石で成り黄金で飾られ、要塞や宮殿で取圍まれ、其美觀は世界に鳴り響いて居たのである。その後の神殿はユダヤ人の崇拜の中心となり、アツシリア王ネブカドネザルのために破壊され、ユダヤ人はバビロンに捕虜として連れ去られて了つた。それは紀元前五百八十五年頃のことであつた。ユダヤ人は捕虜から免れて歸り、種々

苦辛して建てた第二回目の神殿は第一回のものよりは遙に劣つたものであつた。その後キリスト降誕の少し以前に、ヘロデ王はソロモンの神殿に匹敵する様な第三回目の立派な宮殿を建てたのである。以上三ツの神殿は全く同じ場所に位置を占めて居た。キリストが幼児として参詣せられ、學者達の間立つて問答し、兌銀者や商人を追ひ出し、神の道を官べ傳へたのも、此ヘロデの神殿に於てであつた。その後紀元七十年、ローマ皇帝チツスに由るエルサレムの破壊と共に神殿も「一つの石も石の上に祀られずしては遣らじ」との言葉通の運命を見るに至つたのである。百三十年にハドリアン帝がこゝに異端の神ジエビテルの大神殿を建てたが、それは六百八十八年に又回々教のモスクに變へられて了つたのである』

兩人は先づ廣場の南端にあるモスケ、エル、アクサの地下になつて居る宏大な基礎建築を見た。無数の四角な石柱が高く廣々した空間を仕切つて居る。その角柱の上部は穹狀を爲してお互に連り合つて居る。あかりは南方の壁に小さい窓から少し漏れて來るばかりで、内部は物すごい程うす暗い。是は俗にソロモンの厩と云はれてゐる。マリヤはソロモンの神殿やヘロデの神殿の猶残つて居る石垣を示しながら、

マリヤ「この場所はローマとの戦ひにあたり、ユダヤ人が避難した所です。又十字軍の時にも厩となつたと云ふことで御座います」

と諄々として由緒を説き、エスの搖籃、二重門等の由來を細々と説明するのであつた。ブラバ「モスケ、エル、アクサはマホメット教に關して色々の由緒が在るやうですな」マリヤ「ハイ、マホメットが天使ブリエルに導かれ、不思議な白馬にまたがつてメッカ市から一夜の間にエルサレムに來た所として、回教徒に取つて極めて神聖な場所の

一つになつて居るので御座います」

と云ひながらマリヤは後振り返りつゝ、奥に入る。

廣い本堂には圓柱が無數に立つて在り、床は一面に贅澤な毛氈が敷詰められ、所々にムスルマンが坐つて祈禱を捧げてゐる。其後部に岩が有つて其岩の上にキリストの足跡が印せられて居ると云ふのも可笑しいものである。ムスルマンに取つてキリストはアブラハムやモーゼと共に豫言者の一人に數へられて居るが故に、彼等はキリストに就ての由緒をも斯くの如く尊崇畏敬して止まないものである。

次に兩人は廣場の中央にある大きな、クボラをいたゞく八角堂のクーベット、エスサクラ（亦是岩のクボラ）を見物した。この伽藍は大きい岩の土臺の上に建てられて居て、その上部は内部に自然の儘露出して居る。この岩上に於てアブラハムが其子

のイサクを神への犠牲にしやうとしたと傳へられて居る。回教徒は犠牲に成らうとしたのは、イサクで無くてその長子イスマエルだと主張してゐる。何となれば、イスマエルはアラブの種族の先祖になつてゐると云はれてゐるからだ。また回教徒の傳説によればマホメットは彼の不思議の夜の旅行に於て、この場所から天へ昇つた。彼の昇天の際、この岩は豫言者に従つて共に昇らうとしたが、併し神は世界がこの神聖な紀念物を失ふことを欲しないで天使がブリエルを残しその力強い手でその岩をおさねた故に今でもその兩端に天使の指の跡が残つて居るとか唱へられてゐる。サラセン式にいつつこく飾られたステーンド、グラススの窓のために内部は蠟燭を燈さなくては歩行ない程暗かつた。廣場の東北端に大仕掛に發掘された場所がある。地の面から階段をいくつも下つて行くに、セメントや石で縁を取つた大きな貯水池様のもの、一端に達

する。こゝはヨハネ傳に録してあるベチスダのプール（池）だ云ふことで、三十八年間病みたるものが爰で池水の動くのを待つて居て、キリストに由つて癒された所ですよこ、マリヤはこの由緒は根據がありまますと強く言つて證明した。

終日雨が降つたり止んだりして居た。夕方の空は美はしく晴れて紺碧の雲の肌を露はして居る。神殿の廣場の角にある蠟臺の様な形をした塔の上では、アラブがメツカの方角を向ひて頻りに手を舉げて日没前の祈禱をしてゐた。その長く響くオリエシタルなメロデーはエルサレムには應はしく無いと感ぜながら、兩人は急いでアメリカンコロニーを指して歸路に就いた。

（大正一二、七、一一、舊五、二八、北村隆光録）

## 第十章 追 懐 念（一六三九）

その翌日も亦、スバツフォード及びマリヤと共にブラバーサは自動車を雇つて、死海、ヨルダン、エリコ等の地方見物に出かけた。

ジャツファアの門からダマスカスの門、ヘロデの門の前を通つてキドロンの谷からエリコの道へ出た。自動車がしばらく走ると、橄欖山の東南ベタニヤの村を通る。ベタニヤはアラブの名ではエル、アザリエと云つて居る。この名はラザロから來たので、アラブはラザロのしを冠詞と認めて省略したのでいふことである。ラザロは回教徒の間に於ても聖者として尊敬されて居るのである。ベタニヤの村はキリストに關する種々の美しい物語で充ちて居て、その名を聞いただけでも心が暖かく成つて來る。

癩者シモンの家、そこで昔マгдаラのマリヤがキリストの足を涙にて濕し、頭髪を以てぬぐひ香油をこれに塗つた。マルタ、マリヤの姉妹の家も爰にあつた云ふ。ラザロが死後四日を経て蘇へらせられた所も亦こゝで在つたといふ。今はミゼラブルな四五十の回教徒の家が、其處此處に散在して居るに過ぎないのである。

三人は下車してラザロの墓やシモン、マルタ、マリヤの家の廢趾を稱せられて居るものを見物した。ラザロの墓云はれて居るものは非常に大規模なもので、滑りさうな階段を地下へ向つて二十二段も下つて行かねばならぬ。内部は穴藏のやうに眞つ暗で、持つて行つた蠟燭で照して見なければ成らなかつた。丁度補伏山麓の神苑内の地下の修業室をブラバサは思ひ出さずには居られ無かつた。村のアラブの子供等が「バクシツシユ」(小錢のこと)を叫びながら、車の周圍に群がつて来てブラバサ一

行の興を醒ますのであつた。

ペタニアの南でこれに對して居る丘の上にベツファアージェエの村がある。こゝで使徒たちがキリストの指示のまゝに木にながれた一頭の牡の驢馬を見付け、キリストはそれに乗つて都へのり込んだと傳ふる所である。

ペタニアを出て少しばかり歩むと、路傍に小さいチャベルが建つて居る。馭者は主を迎へに來たマルタが爰で彼に逢つた所だと説明する。道は段々と谷に下つて行く。到る處岩の山ばかりで薄く覆はれた土は橄欖は勿論灌木や草類さへも生じない。自然は全く死んだ様でその光景は物すごい位である。所々に駱駝の群が飼放しにしてあるのは、今まで餘所で見受けなかつた光景である。マリヤはよくエルサレムと聖者キリストとの關係を熟知せるもの、如く、頻りに新約の文句を引出して説明して居る。

三人はエリコとエルサレムとの中間まで出て来た。道路は再び上り坂となる。自然は全く荒れ果て、居て、生物らしきものは何一つ見當らない。傳説によれば良きサマリア人の話は此あたりだとか、小山の頂きにサマリア人の旅宿と名の付いた、小さい建物のルインが寂し気に立つて居る。

それより前は道路が山々の中腹を縫ふて死海の谷へと急轉直下するばかりである。道で時々羊の群に逢つた。その群の中には、今生れたばかりの二三匹の羊の兒を荒いメリケン粉の袋に入れて、脊負はされた驢馬が交つて居るのは、何となく可憐な光景であつた。下の方に時々谷の木の間から死海の面が輝いて見えて来る。

三人は遂にヨルダンの谷に下つた。兩側の山は削つた様に屹立して居るが、中は廣々として居て、是が地中海面以下四百メートルの谷底にあるとは到底受けきれない位である。葦草が所々に生れて泥路と砂地の中を死海の濱へと向つた。野生の鶴や放ち飼の駱駝に途々出會ふ。

濱に近く鹽を採るための水溜りがあつて、端には眞白の結晶が附着して居る。そして二三の見すほらしいアラブの小屋が荒い砂の上に立つて居るばかりで、驢馬や駱駝の縛ぎ場になつて居るので恐ろしい程不潔で厭な臭氣が鼻を突く。水面は全く波浪無く朝の麗かな日光にかざやいて居て、死海と云ふ恐ろしい名稱は應はしく無いやうに思はれる。水には強度の混和物が在るために多少の濁りを帯て居る。水を指頭につけて味はつて見ると強烈な苦みが、つた鹽辛い鑛物質を含蓄して居る。鑛物質の割合は百分の二十四乃至二十六で鹽分は百分の七だといふことである。水が重いので泳がうとしても、身體が全部水面に浮かみでて了つて泳ぐことが出来ぬのである。生卵子で

も三分の一は水面に浮かみ出ると云ふ事である。死海の水は一種の滑かな膚ざはりを興へるが、容易に一人の身に觸れた以上は鹽氣が離れないので氣持が悪い。

三人はそれよりヨルダン河へ向つて進んだ。廣い平野は一面に黒ずんだ土で、一見した處非常に豊饒らしく思はれるが、土地は含まれて居る鹽分のために全然不毛の地となつて耕作物は駄目なのである。

しばらくあつて三人は、身の丈以上もある葦の中をすれすれに通りながらヨルダンの河畔マハヂット、ハヂレミ云ふボブラや柳の生へて居る渡船場の様な場所に到着した。細い木の枝を組合せ葦で屋根をふき、濕氣を防ぐため細い材木で一丈ばかりを床を高め、梯子様の階段でのほつて行くやうにした南洋風の土人の原始的の小屋と木蔭の旅客の休憩のため二三のベンチがある。イタリー語を話すスペイン人の二三の

フランチエスカンの坊さんが、そこで休憩して居た。今日は日曜日の事とて、朝早くからこゝへ来て野天でメスをしましたと話して居た。

木立ちの下から河の水面が見える。平常から濁つて居る筈の水は昨日の大雨のために猶更黄色になつて居た、水量は多くして併も流れは急である。有名なのに似氣なく小さいと聞いて居た通りで、河の幅は一百尺前後の程度である。こゝは巡禮の人々の浴場になつて居てキリストが洗禮者のヨハネから洗禮を受けた所と傳へられて居る昔のキリスト教徒の間にはヨルダン河で洗禮を受ける事を非常に大切な事とし、多勢の巡禮者はアラブの案内者に引率されて羊の群の様にヨルダンの谷をこゝ迄下つて来たものである。それから當時この場所は河岸が大理石でおほはれて居たこと云ふことだ。

馭者は特にロシアよりの巡禮者の敬虔な態度に就いて話した。彼等は所在窮乏を忍

んで茶とパンとのみで旅行を続け、その持つて来た金を全部寺々に捧げて了ふのだと云ふ。ブラバースはエルサレムの方々の寺でロシア人の奉獻したと云ふ金銀や寶玉づくしの聖母の像を見受けた事を思ひ出して、高砂島の聖地に於ける信者の態度に比較し長大嘆息を禁じ得ないので在つた。三千世界の救世主殿の御魂瑞の御魂の神柱に現在に面會の便宜ある高砂島のルートバハの信徒の態度は、このロシア人の信仰に比べては實に天地霄壤の差ある事を深く嘆じたのである。ヨルダン河及び死海から程遠からぬ所にエリコがある。現在のものは舊新約時代のエリコとは違つてゐる。是から多少ヨルダンの中央部の方へ離れて居る。見すほらしい小さい村落で土人の家屋と質素な教會やモスクが二三見らるばかりである。谷底に位して居るので氣温は非常に高く、蒸し暑く植物は皆准熱帶的のものである、無花果や棘や芭蕉實の外、黄色の

香りの良いミモザが咲き頻つて居る。

三人は新エリコの村落を通つて西方の山の近くの發掘された新約のエリコを見に行つた。爰にヘロデ王が其宮殿を建てたとの話がある。その一角は今より十餘年前ドイツ人の手によつて發掘されて居た。舊約のエリコの所在は其處とは違つて現在のエリコから東北の方徒歩二十五分ばかりの所にある。

エリコからエルサレムの方角の斷崖になつて居る岩山の眺望は物すごい様である。中腹にギリシヤ正教の一僧院が建つて居る。その背後の山はそこでキリストが惡魔の誘惑を受けた所から「誘惑の山」と云ふ名が付いてゐる。四十日四十夜の斷食の荒野もこの先の方にあると馭者の話であつた。

三人は歸路に着いた途中、橄欖山の麓にあるゲッセマネの園と聖母の寺を訪れて



見た。ゲッセマネの園は三方が道で圍まれ不規則な四角形を爲し、厚い石壁を以て圍らされて居てフランチェスカンの所有に成つてゐる。こゝを新約のゲッセマネと定めたるのは四世紀以前の事だといふ。門の外には自然の岩の頭が地上に現はれてゐる。園内には非常に古いの上でベテロ、ヤコブ及びヨハネが眠つたのだといふ傳へられてゐる。園内には非常に古い數本の橄欖の老樹が植はつて居て、その時からの物だといふはれてゐる。橄欖樹は人間が觸れさへしなければ幹が枯れた後でも、其根から新しい芽生が出て斯して世紀から世紀へと生延びる事だといふ事であるから、この傳説は或は事實に近いものかも知れない。其他エダがキリストに接吻した地點まで明示されて居る。エルサレムや橄欖山の地位からしてゲッセマネの園が此邊りに在つたことは事實らしい。併し七十歩四方ばかりの狭い土地を重くるしい石垣で圍んで其中を墓地のやうに、また近代的の庭園のやう

に飾つて是をゲッセマネの園と爲すことは、無限の大きさと深さを持つたものを無殘にも限り有るもの、中に閉ぢ込めて置くことは實に殘念である。ブラバースは凡ての在來の法則を破つて靈のみで畫かれた様なロンドンのナショナル、ガラリーにあるエバ、グレコの筆を思ひ浮かべて、此の物足りない感じを補つて居た。

聖母の寺はゲッセマネの園に對して居る紀元五世紀以來存在してゐる古い寺院である。その主要部分は地下に成つて居て大理石の階段を四五十下つて行く。マリアの棺その兩親の棺、ヨセフの墓、キリストの血の汗を流された場所等がある。

ケドロン谷をシロアムの村の方へ少しばかり下ると、山の麓に奇妙な三つの建築物が並んで居てアラブが住んでゐる。

ブラバースは初めて此の地に來たり、親切なるアメリカンコロニーの人々に澤山の



瑞月

天國に吾たましいの上りなば

嗚や嘆かん誠の信徒

信徒あまのまことの心知らぬにあらねども

神の教に曳かされて行く

世は如何にうつりかはるも驚くな

瑞の御魂の世ある限りは

第三篇 花笑蝶舞

第十一章 公憤私憤（一六四〇）

夏風に青葉のそよく橄欖山の頂上に三人のアラブが立つて雑談に耽つてゐる。キド  
ロンの谷からは白い煙の様な雲がしづ／＼と橄欖山上目掛けて襲うて来る。ユダヤ人  
の計畫したシオン大學の基礎工事は殆んど落成に近付き、樵夫や大工や手傳が幾十人  
となく忙しげに活動をしてゐる。

アラブはテク、トンク、ツーロと云ふ三人である。

テク「オイ、吾々は回々教のビユリタンとして朝夕忠實に神に仕へ、そして僅の賃金を  
貰つて異教徒の願使に甘んじ、駱駝のやうにこき使はれてゐるのも、餘り氣が利か  
んぢやないか。さう／＼ユダヤ人奴、パレスチナの本國を取返し、此聖地を吾物顔

に振舞ひ、おれ達の仲間を見るに、丸で奴隷の様に虐待するだないか、朝から晩迄同じ様に働いて、ユダヤ人は一弗の俸給を貰ひ、おれ達は半弗よりくれやがらんのだから……本當に亡國の民になりたくないものだなア」

ツロー「何と云つても仕方がないサ。強い者の強い弱者の弱い時節だからなア、ユダヤ人だつて、二千六百年の間、亡國の民として今迄苦んで來たのだから仕方がないよ。チツとは威張らしてやつてもよかる。なア、トング」

トング「彼奴ア、世界統一を夢みてゐやがつたのだが、到頭時節が到來して神の選まれたパレスチナの本國を吾手に入れたのだから、何と云つても世界の覇者だ。長い物に巻かれ……と云うのだから、おれ達の身の安全を計らうと思へばマア辛抱するのだから半分でも月給くれるのはまだしも得だよ。贅澤さへしなけりや、生活を續けて行ける

のだからなア。そう不平を云ふものだないワ、何事も有難いくで暮さへすれば世の中は無事泰平だ。神様の爲に働くと思へば何程月給が安くても待遇に差別があつても構はんぢやないか。それを忍ぶのが回々教のビュリタンたる務めだからなア」

テク「何と云つても、おれは不平でたまらないワ。おれは自分一人の生活が何うだのうだのと云つて、そんなケチなことをボヤクのだない、アラブ一黨の爲に此差別的待遇を憤慨するのだ。不平にも色々な色合があつて、公憤と私憤がある、おれたちは決して私憤ではない天下の公憤だよ」

ツロー「何程公憤だと云つても、蚯蚓が土中でないてるよなもので、何の影響も及ぼすまい、おれ達だつて、テクの言位には興奮し、大にアラブの爲に氣焰を吐く所迄は行かない。何事も時節だからなア」

テク「貴様はそれだから、何時迄もラクダの尻叩き計りして居らねばならんのだ。公憤のないやうな人間は最早人間の資格がないのだ」

ツロー「ヘン、汝のは餘り公憤でもあるまいぢやないか。大体の問題が僅半弗の喰違ひから起つたのだらう、そんな所へ公憤を使つて貰つちや、公憤が落涙するだらう。抑も公憤とは社會とか團體とか、國家とか云ふ大問題に對して、自分の主張を充たすに到らない場合に起す意氣の發動であつて、極めて愉快な面白い男性的氣分を有したものでなくてはなるまい。自己の慾望を満たすに足りない云つて、發動する所の感情の動作といふものは所謂私憤だ。そんな女性的氣分に充されたことを云ふと、ユダヤ人が聞いたら馬鹿にするぞ。國家社會を憂慮する念最も強しと雖も、時代は其意志を容れてくれず、感慨措く能はずして切腹する如き、或は社會を思ふの

情急激にして刻苦勉勵能く其用をなし、社會に盡す如き、時に自分が他人に冷笑されて大に憤慨する所あり、日夜自分の向上に勉勵して、以て能く社會的立場を作る如き、此等は皆公憤に屬するもので男らしい面白い不平だ、天の配劑其妙を得ず嫌の待遇其當を得ざるに感激し、我家を飛出し、青樓に上つて、酒と女で其不平を忘れんとする如き、又夕食の膳部がお粗末だといつて、膳を投げたり、茶碗を破壊する如き、或は自分のズボラを棚に上げ他人の賃金の多きに反感を抱き不平を起す如き、又は主人の亂倫に不平を起し、妻君が役者狂をする如き、又妻君の亂行に主人が自暴自棄となり、藝者買をなすが如き、或は世人に冷笑嘲罵されて不平のやり所なく、自宅へ歸つて、嫌の頭や、窓硝子を叩きわるが如きは、皆私憤に屬するものだ。それよりも怒るなら、ドットはり込んで天地の怒りを發したら何うだ。汝の

やうにホイト坊主が貰ひ酒をこぼしたやうに、あはれつほい聲を出して涙交りにボヤいてをるやうなこゝでさうならうかい。卑屈極まる行動だ。それだからおれ達は時勢を見るの明があるから、こゝ暫くは陰忍してゐるのだ。何れ日出島から救世主が降臨になれば、上下運否のなき様柄かけ引ならして、おれ達迄も安心さして下さるのだからなア」

テク「實際そんな事があるだらうか。おれ達はキリストの再臨を、聖書に仍つて先祖代々から、待ちあぐみ、到頭此聖地で年をよらして了つたのだが、これ丈の不公平の世の中を神様がなぜ公憤を起して、早く平等な愛の世界にして下さらんのだらう……私かに公憤をもらして居つたのだ」

トク「アハ、、、」

ツーロ「私かの公憤が聞いて呆れるワイ。併し乍ら天道様の不平といふのは、暴風を起し、豪雨を降らして大洪水とし、地の不平は地震を起して、山川草木を轉覆させ、悪人を亡ぼし、大掃除をなさるのが、天地の公憤だ、汝の公憤とは大分違うだろ、窓硝子の一枚位壊いでみた所で、餘り世界の改造も出来んだないか」

テク「一体此シオン大學とか云ふのは何をするんだらうな。又してもユダヤ人が頭をもちやけて、おれ達を壓迫する機關であるまいか。それだミすれば、世界人類の爲におれ達は節義を重んじ、假令半日でも人足に使はれる譯には行かんだないか、鷹は飢ても穂をつまんといふからなア」

ツーロ「世界の所在哲學者を集めて神政成就の基礎を固めるのだ。此シオンの國は太陽の天に沖した眞下に當る靈國だから、云はば時計の龍頭のやうなものだ。茲に於て

世界を支配するのは最も天地の經綸上適當の場所だから、そう心配するには及ばないよ、おれ達だつて、やつぱり其恩恵に浴する時が来るのだから、辛抱せい、回々教だとか基督教だとか猶太教だとか、自分の心の中に障壁を設けてひがむから妙な不平が起るのだ。誠の神様は唯一柱よりないのだ。人間を相手にする必要はない。何事も皆神様の御經綸だからなア」

ラク「それでも餘りユダヤ人がイバリちらすだないか。それが俺は氣にくはないのだ。チツタ不平も起らうかい」

ツロー「ユダヤ人にも種々あつて、ボン／＼ぬかす奴ア、カスピンのコンマ以下の代物だよ。丁度おれ達と同じ様な境遇にゐる劣等人種が威張るのだ。あんな者を数に入れて不平をもらすやうな馬鹿があるかい。キリスト再臨の近付いた今日、そんな偏

狭な心はスツカリ放擲して天空海淵 日月と心を齊しうする襟度にならんか。アラブの爲にい、面汚しだぞ。所は世界の中心地、エルサレムの橄欖山上に身をおき乍ら不平を云ふ奴がどこにあるかい。のうトク」

トク「ウン、そらさうだ。人は何事も思ひ様が肝腎だ。おれ達のやうな労働者は労働者らしくして居つたらいいのだ、紳士の真似をせうたつて、到底出来ないからな、あの紳士だつて、元は俺達と同様労働者だつたのだ、精神的労働をやるか、肉體的労働をやるか丈の違ひだ。假令アラブでも紳士紳商になればユダヤ人を願で使ふことが出来るからなア」

ラク「俺は紳士なんか大嫌ひだ。本物の紳士は今日の世の中には一人もない。皆我利我利紳士ばかりだよ、虚偽的生活に甘んじて紳士なんて云つてる奴の面を見るこな



ぐり度くなつてくるワ、先づ今日紳士といふ奴は第一、美装をなすこと、第二、大建造物に住居する事、第三、一箇所以上の別荘を有すること、第四、妾宅を設くる事、第五、物見遊山のしげきこと、第六、一切の労働を禁じ、茶一つ自分の手より汲まぬこと、第七、一日に何回もなく宴會に列して、妖婦を枕頭に侍らし、妖婦の膝を枕に痛飲馬食して、其胃袋に差支なき程度のものたること……此位のものだ。ここに紳士の本領があるかい」

ツロー「そりや汝の云ふ紳士は、俺の云ふ紳士は大に趣が違ふ。俺の云ふ紳士は……第一、人格の最も高きこと、第二、慈悲心に富めること、第三、禮儀を守ること、第四、政治慾を断ち社會の爲に私財を擲つて貢獻すること、第五、一夫一婦の制を遵奉すること、第六、澤山な住宅を有ち無料にて他人に自由に使用せしむること、

第七、神を信じ、家内睦じく感謝の生活を送ること……マアこんなものだ。これを稱して紳士といふのだ」

トク「そんな紳士が今日の世の中に一人でも半分でもあるだらうかな」

ツロー「ないから尊いのだ。ダイヤモンドだつて金だつて、ヨルダン河の砂礫のやうにそこらにごろついてあつてみよ、誰だつて貴重品扱ひはしてくれないよ。無いから尊いよ、太陽だつて一つだから皆が拜むのだよ。あの星みい、誰も一つホシイといふ奴がないだないか」

テク「オイ、ツロー、そんなツローくせんことをいふない。それよりも現代の紳士を標準として考へるのが適確だ、其紳士といふ奴を、俺達が労働總同盟でも起して、警告を與へ改良さしてやるんだなア。今日の紳士の資格を考へてみると、妾宅の數如何

に仍つて、紳士仲間の等級に差別を生じ、宴會の度數と妖婦相識の數如何は人氣に大なる關係を及ぼすのだ。これが今日の所謂紳士規定だ。何と不道理な見解でないか。今日の彼等が健康状態は日夜刻々に害されつゝあるのだ。殊に性慾の隨時隨所てみたさるゝ其半面を考へて見よ。幾多の忌はしい病毒の爲に罌丸内に發生する精虫は追々減殺され、子孫は漸次減少するに至るの種を蒔いてゐるのだ。彼奴等の亂淫亂行は益々民力を減殺せしむるのみならず、家庭の妻女は其反動で、狂氣的に異性の男子を求め、性慾の満足と反感の慰安に家を外にして飛出し、役者部屋へ這ひ込むのだ。紳士の家庭の妻女といふ者に婦徳や貞節は藥にしたくも無い位だ。そして冷い深窓に、男も女も呻吟してゐるのだ。體質の貧弱なる彼奴等の子孫は世の中に立つて何事もなすの力なく、遂には子孫が滅亡するより途は無い。だに云つて

之も自業自得だから仕方があるまい。今の内に彼奴等が目をさまし、共同の友や同族の友と共に働くの妙味を見出し、貧民と共に今迄の態度を改めて社會に活動する様にならなくちや、彼奴等も最早世の終りだ。いつ迄も世は持切りにはさせんじ、さこやらの神さんが仰有つたからなア」

トク「オイ、俺達はまだ時間が來てゐないのに、此木の小蔭でさぼつてゐるのだからユダヤ人と同じよに月給をくれないといつて不平を云ふ譯に行かない。ユダヤ人は勤勉だから、仕事の能率が倍以上になるのだから、汝たちのやうに俸給の額のみで不平を云つたつて駄目だ。サア、チット働かう。土木監督に見付つたら大變だぞ」

テク「エ、仕方がないなア、食はんが悲しきかい」

とスコップを手に提げ乍ら、作事場の方へ厭相に進んで行く。日は漸く暮れ果て、勞

働終結のラツバが橄欖山の峰に轟いて来た。三人はスコツプをかたげた儘逸早くだんご石のゴロ／＼した坂路を嬉しさうに下つて行く。

數多の大工や手傳人足は單縦陣を張つて黒蟻のやうに各家路を指して歸り行く。此等の連中は皆エルサレムの街に寄宿してゐる。ユダヤ人が大多數を占めてゐた。そこへ金剛杖をついて上つて来る一人の男があつた。これは日出島から遙々聖地へ、キリスト再臨の先驅としてやつて来た、ルートバハーの宣傳使ブラバーサであつた。ブラバーサは山上の最も見はらしよき地點に停立し、折柄輝く八日の月を眺め

「仰ぎ見れば、月は真空を稍過ぎて

あたり輝く星のかす／＼

玉さかの月の夜なればこもりのの

たへ難くして登り來りぬ」

かく歌ひて、月の光にエルサレムの街を見おろし乍ら懷郷の念に驅られてゐる。そこへ慌だしくやつて來た一つの影がある。果して何人であらうか。

(大正一二、七、一二、舊五、二九、松村眞澄録)

夜更けの電車

月

ものうくも疲れてし見ゆる車掌はも  
やけに信號の綱を曳きける  
今乗りし労働印の若き人  
疲れし吐息荒くつきをり

遊女とし若き女と角帯の

男はたねす語らひて居り

一日の心づかひに疲れてし

人は動かす眼をつむりをり

瑞月

皇神の恵みの露のしたゝれる

野路に潤ふ道行く吾れは

三五の月西山にかたむきて

草葉にかほる露の御恵

## 第十二章 誘

惑 (一六四一)

ブラバースは蒼空の月を眺め乍ら只一人シヨンポリと立つてゐる。そこへスタークやつて来た女は、一ヶ月以前から真心をこめて聖地の案内をしてくれたマリヤであつた。

マリヤ「聖師様、あなたお一人で御座りますか。妾は又サロメ様と御一所かと思つてゐました」

ブラバ「あ、貴女はマリヤ様で御座りましたか。貴女もお一人で夜分によくお出になりましたな」

マリヤ「ハイ、あなたのお後を慕つて御迷惑とは存じ乍らコロニーをソツと脱け出して

参りましたのですよ。折角サロメ様とシツポリ話さうと思つて御座る所へ、エライ邪魔者が参りまして、お氣を揉ませます。月に村雲、花に嵐とやら、世の中は思ふ様に行かないもので御座いますよ。ホ、ハ、ハ、」

ブラバ 「これは又、妙なお言葉を承はります。サロメ様も時々當山へお参りになり、私も二三回此山上で偶然お目にかゝりましたが、別にサロメ様と内密で話さねばならぬやうな譯もありませんから、何卒氣をもちで下さいますな。私は貴女の御親切な態度に満心の感謝を捧げて居ります」

マリヤ 「聖師は嘘を仰有らぬもの、其お言葉に間違なくば妾も安心致しました。時に一つお願ひし度い事が御座いますが、聞いて貰ふ譯には行きませぬか。此間差上げました手紙はお讀下さつたでせうな」

ブラバ 「成る程二三日以前にアラブが貴女からの手紙だと云つてカトリックの僧院迄届けて呉れましたが、その儘、まだ開封もせず懐に持つて居ります」

マリヤ 「貴方は私の眞心がお分りにならんでせう。いやお嫌ひ遊ばすのでせう。海洋萬里を越えて遙々聖地にお越し遊ばし、清きお身体に微菌が附着した様に思召して穢い女の手紙なんか、讀まない云ふ御精神でせう。それならそれで宜しい、妾は一つ考へねばなりませんから、讀んで貰はない手紙なら、貴方に差上げて無駄ですから返して下さい」

ブラバ 「マリヤさんさう立腹して貰つちや困りますよ。別にそんな考へがあつたのじやありません。あまり聖地の研究に没頭してゐましたので遂失念して居つたのです」

マリヤ 「妾の手紙を忘れられる位なら妾等は念頭に無いのでせうな、あ、悔しい！」

ブラバ「マリヤさん、さうして貴女を忘れませう。エルサレムの停車場へ着くと勿々、あの街道で貴女にお目にかゝり、見知らぬ異郷の空で思はぬ貴女とお會ひした、あの時の印象は一生私は忘れません。さうぞ悪くは思つて下さいますな」

マリヤ「貴方は聖地巡覽の折、さこ迄も妾を愛するに仰有つたじやありませんか。妾はその温かいお言葉が骨身に浸み渡り、もはや今日となつては戀の曲物に捕はれ、さうする事も出来ませぬ。妾の命は貴方の掌中に握られたも同様で御座ります。何卒その手紙を月影に照らし一度読んで下さいませ。そしてキツバリと御返事を承はり度いもので御座ります」

ブラバ「左様ならば折角の御思召、お言葉に従ふか、従はぬかは後の問題として、兎も角もこゝで拜見しませう」

と懐より信書を取り出し、封押し切つて、胸裏かせ乍ら読み初めた……

一、我最も敬愛するルートバハーの聖師ブラバサ様に一書を差上げ、切なる妾が心の丈を告白致します。聖師様、あなたは全世界の人類や凡てのもの、爲に朝夕なにお苦しみ遊ばすのは實に尊く感謝に堪へませぬ。そこへ又妾のやうな大罪人がお近付になりまして益々お苦しみを増なざる事を深く謝罪致します。妾は初めてお目にかゝつてより云ふに云はれぬ愛の情動にからまれ、日夜苦悶を續けて居ります。此苦みを免れんと朝夕神様に祈り、大勇猛心を發揮し自ら心を警め、幾度か鞭をうつつてもく粉にして砕いても此猛烈な情熱の煩惱火は弱い女の意志では消す事が出来ません。妾は煩悶苦惱の淵に沈み、心の鬼に責られて居ります。あゝ、此妾の靈肉共に救ふて下さるものは誰人で御座りませうか。聖師様の尊い温かい愛より外

には何物もありません。妾はご遠も聖師様の愛情の寵もつた、寛かな御懐に抱かれ度いので御座ります。身も魂も全部を捧げ奉つて、さうして暫らく無意識状態になつて眠つて見たう御座ります。聖師様は、はしたない賤しき女と思召さるゝでせうが、貴方に抱かるゝのは妾の生命を生かし、妾をして間もなく、美しい芽を吹き大活動をさして下さる準備になるのではありますまいか。妾の靈も体も戀の焰の爲に疲れきつて居ります。もはや玉の緒の火の消えんばかりになりました。大慈悲の神の教を傳ふる聖師様、妾に云ふものを、ごうか、も一度廻らせて下さいませ。あまり人の來ない閑寂な處で、シンミリと聖師様の温かい愛の御手に抱きしめて復活せしめて下さいませ。萬一それがために假令幾萬の敵を受けることも、幾萬人の罵詈訕笑を受くることも決して恐るゝものではありません。之も神様の何か一つの御

旨だに信じます。そして妾を生かして働かしめて下さる事は聖師様が天下に活躍して下さる事になるのではありますまいか。聖師様の苦みは妾の苦みであると共に妾の苦みは聖師様の苦みであるに相違ありません。可憐なる女の一人を生かさうと殺さうと、お心一つにあるので御座りますから。又妾の死は師の君の死でなくてはなりません。エルサレムの停車場で海洋萬里を隔てた男女がお目にかつたのは實に不可思議な何者か二人の間に結びついて、さうしても一体とならねばならぬやうな、前世からの約束だに信じます。妾は貴方と妾と息を合せて神業に奉仕する事を以て、全く神様の御經綸だに固く信じて居ります。彌勒の神政建設の爲ならば神様の御旨とある以上、如何なる事にも従ひまつらねばなりません。妾が師の君を戀愛する事は決してく罪惡だとは考へられません。何卒絶對の愛を以て妾を愛し

て下さいませ。決して永久の愛を要求するのでは御座りません。もはや妾の靈肉にも一變すべき時機が近づいたのです。假令一分間でも貴方の温かき懐に抱かれさへすれば善いので御座ります。妾は身命を神國成就のために師の君様へ差上げて居るので御座ります。何卒色よい返事を至急に願ひ度いもので御座ります。

あ、惟神靈幸倍坐世

マリヤより

師の君様へ

ブラバースは一巡讀み了はり、ハツと吐息をつき無言のまゝ、双手を組んで俯向いて居る。

マリヤ「師の君様、可憐な妾の心、妾の願をキツと聞いて下さるでせうな」

ブラバ「貴女の真心はよく諒解致しました。然し乍ら一夫一婦の制度のやかましいルー

トバハ一の教を奉ずる宣傳使として、何程貴女が熱烈に愛して下さいらうとも戀愛關係を結ぶ譯には参りません、さうぞければかりは見直し宜直し下さいませ」

マリヤ「さう仰有いますと、貴方は妾を見殺しにせうと仰有るのですか。一夫一婦の制度も亦人倫の大本もよく存じて居ります。然し乍ら、それは理性的の見解で御座りまして、愛の情動はそんな規則張つたものじゃ御座りません、戀にやつれ息もたぐくになつて居る此女をして悶死せしめ玉ふので御座りますか。貴方に會ひさへしなければ妾はこんな煩悶苦惱は起らないので御座ります。貴方は妾を日出島から亡ほしにお越しなされた悪魔だと思ひますわ。神様は我々に戀愛と云ふ貴重なものをお與へ下さつたのです。もし此戀愛を自由に働かす事が出来なければ、日夜神に仕へる妾にさうして此んな考へを起さしめられたでせうか。そんな事仰有らず一滴同情



の涙あらば妾の願を叶へさして下さいませ。決して亂倫亂行の罪にもなりません。貴方の奥さんにして頂きたいことは申しません。今ここで貴方に素気なく刎ねられたが最後、妾はガラリヤの海を最後の場所と致します。さすれば貴方の名譽でもありません。すまい。それ故妾の死は貴方の死ではあるまいかと此手紙に記したので御座ります」

ブラバーサは双手を組み吐息をつき乍ら

ブラバ「あ、誘惑の魔の手はどこ迄も廻つてゐるものだな。岩石に等しき固き男の心も僅か女一人の心に打碎かれんとするのか。寸善尺魔の世の中はよく云つたものだ。あ、さうしたら、宜からうかな」

と小聲に呟き乍ら深き思ひに沈む。マリヤは飛鳥の如くブラバーサに背後より喰ひつき満身の力をこめて抱きしめた。ブラバーサは驚き乍ら心の中に思ふやう、

ブラバ「あ、仕方がない、此通り猛烈な戀におちた女を素気なく振り放せばキツと過ちがあるだらう。天則違反か知らねども暫らく彼女の云ふ通り任せおき、徐に道理を説き目を覺ましてやらねばなるまい」

と心に領づき乍ら言葉を改めて

ブラバ「いや、マリヤ様、よくそこ迄思つて下さいます。實に感謝に堪へませぬ。然し乍ら私はここに参りましてから、一ヶ月に足りません。私はあと七十日の間身体を清潔にして或使命は果さねばなりませんから百日の行を済ます迄、何卒御猶豫を願ひます」

マリヤ「そんな氣休めを云つて妾をお騙しなさるのじやありませんか。その場逃れの云ひ譯より思へません。さうか的確なお言葉を賜りたいもので御座ります」

ブラバースは吐息をつき乍ら永い沈黙に陥つた。マリヤも暫く無言の儘打慄ふてゐたが、思ひきつたやうに口を開いてブラバースの手を固く握り、

マリヤ「妾は貴方に初めてお目にかゝつてから今日で殆ど一ヶ月、さうしたものがセリバシー生活をやつて来た身であり乍ら、その時から戀におち、此一月の間も殆ど千年のやうに長きを感じました。妾のあまり永い沈黙の戀は妾の頭腦を腐らし破つて了ひました。そして妾は今戀の煩悶苦惱を味はつてゐます。私は之を何時迄も秘密として葬り去る事が出来ないのです。何卒一人の女を救ふと思つて妾の戀を諒解して下さい。此猛烈な戀愛を笑ふなら笑つて下さい。又誹るなら誹つて下さい。もはや妾は戀に悩む狂人です。妾の目に浮かぶものは山川草木一切が戀しい師の君のお姿になつて見えるのですもの、狂つてるのかも知れません。あゝ苦しい、こんな不

思議な戀を誰がさせたので御座いませうか。エルサレムの町でお目にかゝつてから妾はスツカリ戀の捕虜になつて了ひました。妾は神様から與へられた戀だと思つて居ります。戀を與へられた時は思ひきり戀を味はひつゝ生るもので御座いませう。妾が師の君を戀ふる事は決して不合理でも不道德でも御座いますまい。神様の御旨だに信ぜられてなりません。嚴肅な神聖な戀が變つて博愛となつた時は、尊さと偉大さと美しさを知る事が出来ませう。ルートバハーの御教の人類愛は斯様な意味を云ふではありませんまいか。人類愛そのものを愛するの愛、それは神様の愛で、即ち自分を見出す爲めの愛であり、自分自身を建設すべき天國に昇るべき愛の初めであり終りでありませう。師の君が妾を理解して下さい。さらん事は實に絶大なる悲しみで御座います。妾もアメリカンユロニーに籍をおき、救世主の再臨を待ち、全世

界救済の使命を持ち乍ら、さうして戯れの戀に浮かれて居れませうか。妾は師の君の手によつて新に生れなくてはならないのです。靈肉ともに復活せねばならぬのです。師の君と愛し愛され、貴方と結ぶ事によつて新に力を與へらるゝので御座ります。もし此妾の戀愛が不合理だと仰有るのならば貴方の神力で取去つて下さいませ。とは云ふものゝ、一度戀ひ慕ふた師の君の温い御顔とそのやさしいお言葉は妾の全身に流れて血となつて居ります」

ブラバ「私は嚴肅なる神様の御命令を頂き神聖にして犯すべからざる此聖地に於て戀愛問題にぶつつかるとは夢にも思ひませんでした。然し愛の情動は何れの國の人も變らないものと見えますなア。貴女の御親切を決して葬り去るやうな勇氣も無いせん。然し乍ら怪しき關係を結ばなくても心と心と融け合ひさへすれば、それで戀愛

は完全に保たれて行くじやありませんか。凡て靈主体從の教を奉ずる我々……然らば靈的の戀仲となりませう。さあ何卒その手を放して下さいませ」

マリヤ「いねく、妾はいつ迄も師の君様の愛の御手に晝も夜も抱いて慰めて欲しいので御座います。いつも尊い懐に抱かれ微笑つゝ戀を歌つて見たいのです。……あ、妾の戀しい慕はしい師の君の御上に幸多かれ……」

ブラバ「御親切は有難う御座いますが、何卒百日の行が済む迄は觸らないで下さい。怪しい考へが起つては修行の邪魔になりますからな」

マリヤ「貴方の御身邊に厄い事が迫つて來た事がお分りになりませんか。妾はそれが心配でならないのです。それ故アメリカンコロニーの牛耳を握る妾と締結して下さいるのならば貴方の危難を逃れるのは當然ですよ。ユダヤ人は同化し難い人種ですか

らな」

ブラバ 「何か私の身の上について危険が迫つて居るのですか。假令如何なる敵が来ても神様にお任せした私、左様な事に驚く事はありませんから、先づ安心して下さい」

マリヤ 「貴方は、さう樂觀して居られますが、貴方の周囲には澤山の悪魔が取圍んで居りますよ。今妾は師の君の言葉に従ひ戀愛を思ひきり路傍相逢ふ人の如き態度を採らうと思つても、それが出来ないのです。貴方のお身の上を思へば涙が出てたまりません。それで貴方の側を離れたくはありません」

ブラバ 「マリヤさん、そんな事云つて強迫するのじやありませんか。随分悪辣な手段を廻らして戀の慾望を遂げんとなさるのではあるまいかと思はれてなりませんわ」

マリヤ 「いづくさうして、誠の神様の教を信ずるビユリタンの一人として嘘偽りが

申されませうか。神様の冥罰が恐ろしう御座います。妾は師の君様の身邊を守るため假令戀せなくても離れ度くはないのです。此エルサレムの町へ貴方がおいでになつてから日の出島の聖師くゞ云つて貴方に歸順する人が澤山出来ましたが、眞に貴方を愛する人が果して幾人ありませうか。凡ての人が師の君に對して力一杯敬して居るやうですが、然し妾は案ぜられてならないのです。また此方へおいでになつてから間もなく、土地人情もお分りになつてゐないのですからな」

ブラバ 「然らば貴女の御意見に任します。さうなつて下さいます。然し乍らこゝ七十日の間は特に猶豫を願ひ度いので御座います。貴女の要求を容れました上は相對的に私の要求も容れて貰はねばなりませんからな」

マリヤ 「さうも仕方がありません。然らば陰忍致します。さうぞ注意をして外の女に相